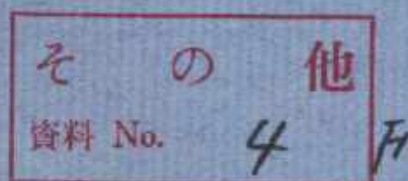


地域における勤労青少年クラブ活動の あり方についての研究報告

昭和 51 年 3 月



(社) 全国勤労青少年ホーム協議会



ま え が き

本報告は、労働省婦人少年局の委託を受けて、「地域における勤労青少年クラブ活動のあり方」について研究した結果をとりまとめたものである。

関係各位の御参考になれば幸いである。

昭和 51 年 3 月

社団法人 全国勤労青少年ホーム協議会

会長 中 西 實

研究会構成委員

委員

荒	井	寛	松本市勤労青少年ホーム館長
岡	本	英 雄	雇用促進事業団職業研究所 研究員
荻	野	博 章	静岡県富士勤労青少年ホーム館長
斉	藤	茂	雇用促進事業団全国勤労青少年会館 教養相談部長
坂	口	順 治	東洋大学助教授
鈴	木	春 男	千葉大学助教授

(五十音順)

目 次

1. 研究会の経過報告.....	1
2. クラブ活動の実態調査等.....	3
3. 地域における勤労青少年クラブ活動の現状.....	荒 井 寛...12
4. (座談会) 勤労青少年クラブ活動の現状と問題点.....	17
5. クラブ活動育成に必要な施策.....	荻 野 博 章...25
6. クラブ活動の意義と活動のあり方.....	鈴 木 春 男...29
7. クラブ活動の経過観察と指導者のあり方.....	坂 口 順 治...37
8. クラブ・リーダーの資格と役割.....	岡 本 英 雄...44

1. 研究会の経過報告

(1) 準備会（50年7月23日）

当協議会斉藤専務理事、荒井常務理事、沼田理事3名が労働省係官から委託研究について説明を受け、具体的な実施に当たっての「実施要領」及び「調査表」を作成した。

(2) 第1回会合（50年8月20日）（全体会）

準備会において作成した「実施要領」及び「調査表」等について提出し、当協議会全体会の承認を求めた。実態調査の方法のうち調査対象を各ブロック毎に1定数ずつ割り当てることとしていたのを、無作為抽出にすることに訂正する等一部変更があり「実施要領」は次のとおり承認された。

なお、「調査表」等については、各委員の意見を聞き実施するよう指示された。

「地域における勤労青年クラブ活動のあり方」の研究委託実施要領

1. 研究調査の方法

実態調査、座談会、研究まとめの三種類とする。

2. 実態調査の方法

(1) 別添調査表及びアンケートに基づき実施する。

(2) 1%の抽出率により調査対象ホームを抽出し、抽出されたホームにあるクラブを3%の抽出率により抽出選定する。

選定したクラブの活動状況を別添調査表により調査するとともに、クラブ員10名についてアンケート調査を実施する。

3. 座談会の実施

(1) 調査結果に基づき、委員6名程度を委嘱して実施し、まとめる。

(2) 委員の委嘱は次のとおりとする。

大 学 助 教 授（坂口、鈴木）

職業研究所研究員（岡本）

ホ ー ム 館 長（荻野・荒井）

4. 研究まとめの方法

(1) 座談会の結果に基づき次のとおり各担当者に委嘱して行う。

・地域における勤労青少年クラブ活動の現状

荒井 松本ホーム館長

・クラブ活動の意義と活動のあり方

千葉大 鈴木助教授

・クラブ活動の経過観察とそれに基づく指導のあり方

東洋大 坂口助教授

・クラブリーダーの資格と役割

職 研 岡本研究員

・クラブ活動育成に必要な施策

荻野富士ホーム館長

5. 日 程

- ・実態調査 50年9月中
- ・座談会 50年10月31日
- ・執筆 50年11月～51年1月
- ・まとめのための会合 50年2月上旬

(3) 実態調査実施(50年9月16日)

委員就任方を依頼するとともに一部「調査表」等を整理のうえ9月6日各勤労青少年ホームあて依頼文を送付した。

(4) 第2回会合(50年12月10日)(委員会)

調査の結果に基づき、「座談会」を開催すると同時に論文作成に当たって必要な問題点について検討討論した。

(5) 第3回会合(51年2月23日)(委員会)

「座談会」のまとめ、論文等について意見交換を行い。報告書原案を作成した。

(6) 第4回会合(51年2月24日)(全体会)

前日の委員会作成の原案について検討し、一部修正されたが承認された。

2. クラブ活動の実態調査等

勤労青少年ホームにおけるクラブ活動の実態を把握するため、「研究委託実施要領」に基づき、別添「依頼文」「調査表」等によりクラブ活動の実態とクラブ員の意識調査アンケートを実施した。その結果は次のとおりであった。

「勤労青少年クラブ」活動実態調査 結果表

1. 調査数等

調査対象 ホーム数	回 答 ホーム数	調査対象 クラブ数	回 答 クラブ数	休・廃止 クラブ数	集 計 クラブ数
44	(88.6) 39	166	(81.9) 136	26	110
		(100.0)	(19.1)	集計対象ホ ーム 36	

2. クラブ員数

男	女	計
(48.8) 9.4	(51.2) 9.9	(100.0) 19.4

3. クラブ活動

スポーツ	趣 味	社 会 奉 動 仕 活 動	教 養	そ の 他	計
(20.0) 22	(51.8) 57	(2.7) 3	(16.4) 18	(9.1) 10	(100.0) 110

4. 結 成

6 月未満	1 年未満 6 月以上	2 年未満 1 年以上	2 年以上	計
(0.9) 1	(5.5) 6	(21.8) 24	(71.8) 79	(100.0) 110

5. 端 緒

講 習 会	ホームの 指 導	会社クラ ブの発展	別のグル ープの発 展	そ の 他	計
(26.4) 29	(40.0) 44	(1.8) 2	(5.5) 6	(26.4) 29	(100.0) 110

6. クラブ開催

開催回数	定 例	臨 時
15.3	13.9	1.4

7. 参加人数

参加人数	常 時
13.1	(73.8) 9.6

8. クラブ員の増減

ふえた	へった	変わらない
(42.7) 47	(14.6) 16	(42.7) 47

9. 参加人員の増減

ふえた	へった	変わらない
(35.5) 39	(20.0) 22	(44.5) 49

10. 他クラブとの交流

な し	あ り	ホーム内	ホーム外	そ の 他
(32.8) 36	(67.3) 74	48	29	4

11. クラブリーダー

あ り	人 員	な し
(98.2) 108	[1.53] 169	(1.8) 2

12. クラブ指導者

あ り	ホーム 職 員	部 外	その他	な し
(66.4) 73	(67.3) 13	42	21	(33.6) 37

「あり」の
うち2重
回答あり

13. 必要経費

負担額	ホ ム 担	ク ラ ブ	ホ ト ブ 員 ム ラ	そ の 他
(円) 866	(2.9) 3	(78.1) 82	(19.0) 20	(4.8) 5

14. 親睦行事

し て い ない	し て い る	ハ イ キ ン グ	バ サ ー	夕 食 会	ダ ン ス パ ー ティ	そ の 他
(19.1) 21	(80.9) (100) 89	(48.3) 43	(3.4) 3	(25.8) 23	(23.6) 21	(50.6) 45

「勤労青少年クラブ活動」アンケート 結果表

1. アンケート総数 954 (男 486 (50.9) 女 468 (49.1))

2. 年 令

18才未満	18才以上 20才未満	20才以上 23才未満	23才以上 25才未満	25才以上	計	不 明
(1.0) 10	(12.3) 117	(43.0) 410	(30.8) 294	(12.6) 120	(100.0) 954	(0.3) 3

3. 職 業

事 務	販 売	生 産	その他	計	不 明
(42.0) 401	(7.5) 72	(19.2) 183	(30.8) 294	(100.0) 954	(0.4) 4

4. 学 歴

大 卒	短大卒	高 卒	中 卒	定時高	計	不 明
(4.5) 45	(7.2) 69	(74.0) 706	(12.6) 120	(0.1) 1	(100.0) 954	(1.4) 13

6. クラブに加入して

1月未満	1月以上 6月未満	6月以上 1年未満	1年以上	計
(5.7) 54	(25.3) 241	(18.8) 179	(50.3) 480	(100.0) 954

7. クラブに入った動機

講座から	友 人 に すすめられ	ホームの 職員にす すすめられ	ビラ等 をみて	そ の 他	計
(8.5) 81	(45.4) 433	(6.8) 65	(12.5) 119	(26.8) 254	(100.0) 954

8. クラブへの出席率（この3月間）

毎 回	80%以上	50%以上 80%未満	半分以下	計	不 明
(25.8) 246	(39.2) 374	(27.3) 260	(7.3) 70	(100.0) 954	(0.4) 4

9. 欠席する事由（不明の大部分は毎回出席者である）

勤めの都合	自分の都合	何となく	他のクラブ や会合に出 席	そ の 他	計	不 明
(45.0) 439	(33.3) 318	(3.6) 34	(6.0) 57	(6.6) 53	(100.0) 954	(5.6) 53

10. 楽しくするために必要なこと（3つ）

良いリーダー	良い先生	人目が適当 な 人 数	お金がかか らない	活動する場 所がうまく えられる	気の合った 人達の集り
(14.5) 378	(8.2) 214	(9.8) 255	(8.5) 184	(10.7) 278	(15.4) 403

クラブが 自由に活 動できる	いつも新鮮 な企画	発表会等 活動の目標	他のクラブ との交流	ホーム内	他 ホ ー ム	ホーム以外 のクラブ	計
(9.7) 253	(9.9) 258	(8.1) 212	(6.7) 175	68	38	40	(100.0) 2,610

(100.0) (38.9) (21.7) (22.9)

11. クラブに入ってよかったと思うこと（該当するものすべて）

友人ができた	技能が修得できた	毎日が楽しくなった	実生活に役立つ	その他	計
(40.8) 608	(20.8) 310	(20.8) 310	(12.8) 190	(4.8) 72	(100.0) 1,490

12. 他のクラブへの加入状況

入っていない	入っている	ホーム	会社	ホーム 会社以外	計	不明
(66.0) 630	(33.5) 320	192	55	73	(100.0) 954	(0.4) 4
	(100.0)	(60.0)	(17.2)	(22.8)		

どちらが
楽しいか

このクラブ	他のクラブ	計	不明
(40.6) 130	(22.5) 72	(100.0) 954	(36.9) 118

13. 前に同様のクラブの加入状況

ない	ある	計	不明
(87.6) 836	(10.0) 95	(100.0) 954	(2.4) 23

「労働省婦人少年局作成の資料」（昭和49年度実績）

(1) 勤労青少年ホーム利用状況

1 全般的利用状況

(1) 利用延人員（人）	5,631,106
1 ホームあたり延／年間	20,256
／ 月	1,688
／ 日	68

利用内わけ	延回数（回）	延人員（人）	構成比（％）
ホーム主催行事	57,412	1,082,150	19.3
クラブ等団体利用	147,345	1,403,037	24.9
個別利用	—	3,145,919	55.8
計		5,631,106	100.0

2 個人別利用状況

室 名	利用人員(人)	構成比(%)
体 育 室	1,066,977	33.9
娯楽談話室	654,587	20.8
音楽室	469,885	14.9
図書室	156,122	5.0
和 室	81,306	2.6
そ の 他	717,042	22.8
計	3,145,919	100.0

(278ホーム)

3 登録状況

(1) <年令別>

区 分		計	18才以下	19～20才	21～24才	25才以上
男	人 員(人) 構 成 比(%)	213,568 100.0	18,417 8.6	53,559 25.1	116,808 54.7	24,784 11.6
女	人 員 %	278,133 100.0	21,437 7.7	87,807 31.6	155,494 55.9	13,395 4.8
計	人 員 %	491,701 100.0	39,854 8.1	141,366 28.8	272,302 55.4	38,179 7.7

(2) <職種別>

区 分		計	工 員	店 員	事 務 員	そ の 他
男	人 員(人) 構 成 比(%)	200,058 100.0	43,958 22.0	11,243 5.6	20,472 10.2	124,385 62.2
女	人 員 %	259,598 100.0	24,999 9.6	13,172 5.1	57,534 22.2	163,893 63.1
計	人 員 %	459,656 100.0	68,957 15.0	24,415 5.3	78,006 16.9	288,278 62.8

(273ホーム)

4 ホームにおけるクラブの利用状況

(1)

ク ラ ブ 数	2,705クラブ
クラブ延利用人員	1,462,498人
クラブ利用回数	139,505回
1回あたり利用人員	10人
1ホームあたりクラブ数	13クラブ

(2)

区 分	ク ラ ブ 数	構成比(%)
スポーツレクリエーション関係	708クラブ	26.2%
趣味、教養関係	1,997クラブ	73.8%
計	2,705クラブ	100.0%

(3) クラブ内容別利用状況

	ク ラ ブ 内 容	クラブ数	利 用 延人員 (人)	利 用 延回数 (回)	1回あたり 利用人員 (人)	クラブ数の 構成比 (%)
ス ポ ー ツ ・ レ ク リ ー シ ョ ン 等	登山, ハイキング, ホステリング等	63	14,372	1,197	11	8.9
	空手, 合気道	86	45,322	5,762	8	12.1
	卓 球	176	119,152	10,736	11	24.9
	バレー, バスケット, バドミントン	171	187,792	7,568	25	24.2
	野球, テニス, ソフトボール	72	21,960	2,088	11	10.2
	体操, ボディビル, 柔剣道	62	41,602	4,092	10	8.9
	そ の 他	78	10,218	780	13	10.8
	小 計	708 (26.2%)	440,418	32,223	—	100.0
趣 味 ・ 教 養 等	軽音楽愛好会, 器楽, ギター, バンド	256	59,180	12,288	5	12.8
	フォークソング, コーラス, 詩吟	150	48,000	4,950	10	7.5
	フォークダンス, 社交ダンス	208	119,392	5,348	22	10.4
	民謡, 謡曲	17	4,267	561	8	0.9
	演 芸	55	11,935	1,705	7	2.8
	料 理	105	46,935	3,350	14	5.3
	華 道	65	27,510	2,145	13	3.3
	茶 道	95	34,770	4,075	9	4.8
	和・洋裁	20	6,319	679	9	1.0
	美 術	81	12,636	3,159	4	4.1
	文芸, 読書	25	1,548	226	7	1.3
	カメラ	80	11,482	3,116	4	4.0
	書道, ペン習字	81	26,973	2,592	14	4.1
	囲碁, 将棋	20	2,978	722	4	1.0
	手工芸, フラワーデザイン	31	6,634	806	8	1.6
	着物着付	22	8,714	529	16	1.1
	英会話	35	16,090	11,355	14	1.8
	学習, 研究会	44	15,488	1,420	11	2.2
	そ の 他	607	501,229	48,257	14	30.4
	小 計	1,997 (73.8%)	962,080	107,282	—	100.0
計		2,705 (100.0%)	1,402,498	139,505	10	

(208ホーム)

別 添

全 勤 ホ 協 第 23 号

昭 和 50 年 9 月 5 日

会 員 殿

(社)全国勤労青少年ホーム協議会

会 長 中 西 實

クラブ活動の実態調査について

労働省から「地域における勤労青少年クラブ活動のあり方」について研究委託があり、そのため勤労青少年ホームにあるクラブ活動の実態を調査することとなり、無作為抽出をしたところ貴ホームが調査対象に選ばれました。業務多忙のところ恐れ入りますが、下記により「調査表」、「アンケート」及び「総括表」を作成のうえ10月10日までに御送付頂くようお願いいたします。

記

1. 対象クラブ

次のクラブが調査対象となりました。

2. 調 査 表

対象クラブ毎に1枚、本年9月1日現在の状況について、ホーム職員又はクラブリーダーが記入して下さい。解散等のため記入ができないときは、1のらんのみを記入し、その理由を最下段に（解散又は休止しているときは、その年月日を明記し）記入して下さい。

3. アンケート

調査対象となったクラブ員に、クラブ活動の行われる日のうち一定の期日を定めて、勤労青少年ホームに来た順に10名に記入させて下さい。10名に達しないときは、その人員で結構です。記入にあたっては、お互いに相談等をしないよう御配慮下さい。

4. 総括表

調査及びアンケートの夫々について集計し、総括表を作成して送付して下さい。対象クラブが1つのところは、アンケートのみの総括表で結構です。

5. その他

(1) 調査内容については、個々のホームの内容を公表することはありませんので、ありのまま御報告下さい。

(2) 調査の集計結果は、その結果に基づき座談会等を開くほか、発表します。

昭和50年9月1日現在

「勤労青少年クラブ活動」実態調査表

(社)全国勤労青少年ホーム協議会

勤労青少年 ホーム名等	記入者 名 等	館 長 名 等	TEL - -
----------------	------------	------------	---------

1. クラブの概要

- (1) クラブ名 (2) クラブ員 男 人 女 人 計 人
- (3) クラブの主たる活動内容
- (4) 結成年月日 昭和 年 月 日 (満 年 月)
- (5) クラブ結成の端緒 ①講習会 ②ホームの指導 ③会社クラブの発展
④別のグループの発展 ⑤その他

2. クラブの活動状況 (過去3月間)

- (1) クラブ開催状況 この3月間に 回 (うち定例 回, 臨時 回)
- (2) クラブ参加人員 1回平均 人 (うち常時参加者 人)
- (3) クラブ員の増減 この3月間に ①ふえた ②へった ③変わらない
- (4) クラブ参加人員の増減 // ①ふえた ②へった ③変わらない
- (5) 他のクラブとの交流 ①なし ②あり (③ホーム内 ④ホーム外の類似クラブ
⑤その他)

3. クラブの指導者等

- (1) クラブリーダー ①あり (人) ②なし
- (2) クラブの指導者 ①あり (③ホームの職員 ④部外講師 ⑤その他) ②なし

4. クラブ活動に必要な経費 (過去3月間でクラブ員の負担月額 円)

- ①全額ホーム負担 ②全額クラブ員負担 ③ホームとクラブ員の負担 ④その他 ()

5. クラブで主たる活動以外に親睦行事として何かやっていますか

- ①いない
- ②している ③ハイキング ④バザー ⑤夕食会 ⑥ダンスパーティ ⑦その他 ()

6. クラブ活動を行う上で必要な事項又は問題点等があれば記入して下さい。

「勤労青少年クラブ活動」アンケート

記入者の	①年令	②職業	イ事務 ハ生産	ロ販売 ニその他	③学歴 イ大卒 ハ高卒	ロ短大卒 ニ中卒	④性別 イ男 ロ女	
勤労青少年ホーム名			クラブ名					

1. 何時からこのクラブに入っていますか。 年 月 から
2. どういう動機でこのクラブに入りましたか。
 ①講座から ②友人にすすめられ ③ホームの職員にすすめられ ④ビラ等をみて
 ⑤その他
3. クラブへの程度出席しましたか(この3月間)
 ①毎回 ②80%以上 ③50%から80%ぐらいまで ④半分以下
4. 欠席するのはどういうときですか。(主たるもの1つに○印を付して下さい)
 ①勤めの都合 ②自分の都合 ③何となく ④他のクラブや会合に出席 ⑤その他
5. クラブ活動を楽しむためにはどういうことが必要ですか(該当するもの3つまで答えて下さい)。
 ①良いリーダーをうること。 ②良い先生をうること
 ③人員が適当な人数であること ④お金があまりかからないこと
 ⑤活動する場所がうまくえられること ⑥気の合った人達の集りであること
 ⑦クラブが自由に活動できること ⑧いつも新鮮な企画が行われること
 ⑨発表会等活動の目標があること ⑩他のクラブと交流のあること (④ホーム内
 ⑪他のホーム ⑫ホーム以外のクラブ)
6. クラブに入ってよかったと思うことはどういうことですか(該当するものすべてに記入して下さい)。
 ①友人ができた ②技能が修得できた ③毎日が楽しくなった ④実生活に役立つ
 ⑤その他 ()
7. 他のクラブに入っていますか。
 ①入っていない ②入っている → ④ホームのクラブ ⑤会社のクラブ ⑥③④以外のクラブ
 ラブ
 →どんなクラブですか ()
 →どちらが楽しいですか ⑦このクラブ ⑧他のクラブ
8. 前にこれと同じようなクラブに入ったことがありますか。
 ①ない ②ある → 何時やめましたか
 →何故やめましたか
9. クラブ活動について何か意見があれば書いて下さい。

(注)学歴らんで定時制(夜間)に通学中のものは、該当学歴を×印すること。

3. 地域における勤労 青少年クラブ活動の現状

松本市勤労青少年ホーム館長 荒井 寛

標記のテーマで勤労青少年クラブ活動の現状を分析するには、データーが余りにも少ないわけであるが、ここではこのほど行なった「勤労青少年クラブ活動実態調査」ならびに「勤労青少年クラブ活動アンケート」の結果を中心に、毎年労働省が集計している「勤労青少年ホーム利用状況」をはじめ各ブロック・県等の協議会が行なったアンケート等若干の資料を参考に筆をすすめてみたい。

□ 勤労青少年クラブ活動実態調査

1. クラブの概要

クラブ員の構成

男9.4人、女9.9人、合計19.3人というのが1クラブあたりの構成員数である。

全国のホーム登録者をみると男子にくらべ女子が圧倒的に多くなっているが（S49年度実績による労働省への報告では、女子が男子の3割増）クラブ加入者数でみれば、その差はほとんどない。

男女半々で20人というのが、クラブの平均的数値といえよう。

クラブの主たる活動内容

クラブ活動内容を趣味と答えたクラブが過半数の57（51.8%）でトップ、スポーツが22（20%）で二位、教養が18（16.4%）で三位となっている。ついでその他10、ボランティア活動3とつづいている。

勤労青少年ホームの設置目的である青少年余暇活用場の提供という観点からいえば、目的に沿ったクラブが多く結成されているともいえよう。

なお、趣味、教養、スポーツなどを主たる活動内容とするクラブにあっても、最近ボランティア活動を取り入れるクラブがめだつようであるが、今回の調査ではこれを主な活動内容としたクラブが3クラブ（2.7%）あるのが注目される。

クラブの結成

クラブ結成後2年以上のクラブが79（71.8%）ついで1年以上2年未満が24（21.8%）となっており、この両者をあわせると93.6%となる。

開設後ある程度の年数を経た勤労青少年ホームにおいては、クラブも一応安定化、固定化の傾向がみられるのではなからうか。

クラブ結成の端緒

クラブ結成の発端は、ホームの指導によるものが44（40％）でもっとも多く、ついで講習会終了生が結成したクラブと、その他が29（ともに26.4％）でこれについている。

ホームの指導によるものと講習会からをあわせると66.4％となり、クラブの約3分の2はホームの指導、働きかけによって生まれたとみられる。

2. クラブの活動状況（過去3月間）

クラブ開催状況

過去3か月間のクラブ開催状況は、定例が13.9回、臨時1.4回の合計15.3回平均となっている。

つまり勤労青少年ホームのクラブ活動は、毎週1回の定例会をもつというのが一般的のようである。

参加人員

1回あたりの参加人員は平均13.1人、うち常時参加者は9.6人（73.8％）となっている。

クラブメンバーの平均が20人弱であるのでその6～7割の出席によって定例会がもたれているとみられる。

クラブ員の増減

この3か月間のクラブ員数は、ふえた、変わらないがそれぞれ47クラブ（各42.7％）で、へったというクラブは16クラブ（14.6％）である。クラブ員数は増加傾向を示している。

参加人員の増減

同じ期間の参加人員では、変わらないが49クラブ（44.5％）、ふえたが39クラブ（35.5％）へったが22クラブ（20％）で、やはり増加の傾向となっている。

他のクラブとの交流

他クラブとの交流なしクラブが36（32.8％）なのに対し、交流を行なっているクラブは、約2倍の74クラブ（67.3％）となっている。

交流先では、同一ホーム内クラブとの交流が48ともっとも多く、ついでホーム外のクラブとの交流が29、その他のクラブとの交流4の順となっている。

なお、この数字からみるとホーム内のクラブ、ホーム外のクラブのいずれとも交流をしているクラブも数クラブであるとみられる。

3. クラブの指導者等

クラブリーダー

リーダーありが当然ながら108（98.2％）とほとんどであるが、リーダーなしのクラブが2クラブ（1.8％）ある。

リーダー数は、169人で1クラブあたり1.53人となっており、クラブの約半数はサブリーダー

ーをもっているといえよう。

クラブ指導者

73クラブ(66.4%)が指導者ありと答えており、なしは37クラブ(33.6%)ではほぼ2:1の割合となっている。

指導者の内訳では、部外の講師が42人でいちばん多く、ついでその他の21人、ホーム職員13人の順となっている。

必要経費

クラブ活動に要した経費(クラブ員1人あたりの負担月額)は、平均866円となっている。この経費負担のようすをみると各クラブ員が個人負担するが82(78.1%)でもっとも多く、ついでホームとクラブで負担が20(19%)となっている。ホーム負担というのが3クラブ(2.9%)みうけられる。

親睦行事

クラブが主とする活動以外に行なう行事についての設問であるが、行なっているクラブが89(80.9%)なのに対し、行なっていないクラブが21(19.1%)となっている。

行なっているクラブの行事内容は、多岐にわたっているためか、その他と答えたものももっとも多く45クラブ(50.6%)となっている。

これを除けば、ハイキングが43(48.3%)といちばん多く、あとは夕食会の23(25.8%)ダンスパーティーの21(23.6)、バザー3(3.4%)とつづいている。

□ 勤労青少年クラブ活動アンケート

年令

全国の勤労青少年ホームのほとんどが登録年令を15歳～25歳としているため、当然ながらクラブ員の年令もこの年代がほとんど(87.1%)であるが、とくに20歳以上23歳未満が410人(43%)、23歳以上25歳未満294人(30.8%)と多く、この両者で73.8%を占める。

この数字は、他の調査による勤労青少年ホームの登録者数、利用者数の年令構成とはほぼ同傾向を示しているといえよう。

25歳以上のクラブ員が120人(12.6%)みえるがこれはクラブの指導者、リーダーおよびリーダー的立場にあるOBであろうか。いずれにしてもクラブ活動を円滑にすすめるために必要なメンバーであろう。

職業

事務職が42%と圧倒的に多い。生産(19.2%)販売(7.5%)が意外と少ない結果がでている。

その他が30.8%もあることを考えあわせると設問にひと工夫必要なような気もする。

事務職と答えた中に事務専門以外の職種がある程度入っているのではとも思考される。

ちなみに、労働省への報告による登録者の職種別では、工員15%、店員5.3%、事務員16.9

％、その他62.8％となっている。

学歴

高卒の74.0％は、期せずしてクラブ員の年令20歳～25歳の73.8％とはほぼ同じである。高校卒20歳～25歳という勤労青少年ホーム利用者の平均像がここにも見られるのではなかろうか。

進学率の向上とともに中学卒の絶対数が減少し、ホーム利用者中に占める中学卒の比率も低下の傾向をたどるのではなかろうか。

平均12.6％という中卒者も、地域差が相当あるのではなかろうか。

しかし、大卒者（4.5％）は、短大卒（7.2％）と合わせても11.7％いることが注目される。

クラブに加入して（経過年月）

クラブ加入後1年以上の人が480人で過半数（50.3％）を占めている。加入後1月未満の人は5.7％とさすがに少ないが、加入後1月～6月の人が、6月～1年の人を上廻っており、クラブ構成員の交代が常にすすんでいることがうかがえる。

クラブ加入の動機

「実態調査」のクラブ結成の端緒では、ホームの指導（40％）、講習会（26.4％）からが高率を占めていたのに対し、クラブ員の加入の動機では、この二者が非常に少なく（それぞれ、6.8％、8.5％）友人にすすめられ、ビラをみてなどが多くなっている。

この設問でもクラブ員交代のようすがうかがえる。

クラブへの出席率

80％以上出席が39.2％、ついで毎回出席が25.8％、50～80％出席が27.3％となっており50％以下の出席者は7.3％と非常に少ない。

余暇利用のクラブ活動出席率としては、よい線をいっているのではなかろうか。それだけクラブに期待をもっているともいえよう。

欠席の事由

クラブ活動欠席の場合、その事由は残業等勤務の都合が45％でもっとも多く、ついで自分の都合が33.3％となっている。その他の事由による欠席はすべて数％にすぎない。

クラブ活動を楽しむために必要なこと

クラブ活動を楽しむための意識調査であるが、設問の項目が多いこと、その項目を三つまで選ばせたこと、考えられる要素が多岐にわたること、各人の考えも多様であることなどのため、回答もほぼまんべんなく平均化されている。

しいてあげれば、気の合った人の集まり（15.4％）、良いリーダー（14.5％）、活動場所があること（10.7％）の三項目が10％台、ついで新鮮な企画、適当な人数、自由に活動できることがそれぞれ9％台でつづいている。

クラブに入ってよかったと思うこと

友人ができたをあげた人が圧倒的に多い。（40.8％）これに毎日が楽しくなった（20.8％）を加えると約半の61.6％となる。

これと対象的ともいえる技能修得ができた（20.8％）実生活に役立つ（12.8％）の合計が33.6％と約3割を占めており、この面からクラブ員のクラブに求めるものの一端がうかがえると思う。

他のクラブに加入しているか

他のクラブ加入者が約3割（33.5％）、加入していない人が約7割（66.0％）の色わけとなっている。

他のクラブに加入している人も、その60％は同一ホーム内のクラブへの重複加入となっている。

なお、他のクラブに加入している人への設問「どちらが楽しいか」に対する回答では、このクラブが40.6％、他のクラブが22.5％不明36.9％という結果がでている。

前に同様のクラブに加入したことがあるか

以前にこれと同じようなクラブに入ったことがないという人がほとんど（87.6％）であり、あると答えた人は10％である。

以上、別稿調査方法のように、全国の勤労青少年ホームからの無作為抽出によるアンケートの結果を各項目ごとに一応の整理をしたわけであるが、勤労青少年ホームにあるクラブの平均像を要約すれば次のようになるのではなかろうか。

- ◎ クラブ員は約20人で、男女数はほぼ同数である。そして男女とも高卒、20歳～25歳の若者が主力を占めている。
- ◎ クラブ活動の主たる内容を趣味、教養とするものが非常に多く、スポーツがこれについている。
- ◎ クラブ結成にあたっては、ホームの働きかけ、指導（教室からも含む）によって生まれたものが3割を占める。しかしクラブ結成後ある程度の年月を経るとクラブ員の交代が相当行なわれる。クラブ員数は増加の傾向にある。
- ◎ ほとんどのクラブはリーダーを置いているが、半数のクラブは複数のリーダーを、3割のクラブは指導者をもっている。
- ◎ クラブは週1回定例会をもち、常時6～7割のクラブ員が出席している。また、他クラブとの交流も比較的活発に行なわれている。
- ◎ クラブ員が、クラブに期待するものは技術の習得などもあるが、それ以上に友人、仲間づくりと人間性回復の場ということである。

(座談会)

4. 勤労青少年クラブ活動の現状と問題点

出席者	松本市勤労青少年ホーム館長	
(五十音順)	荒井寛	
	雇用促進事業団職業研究所 研究員	
	岡本英雄	
	静岡県富士勤労青少年ホーム館長	
	荻野博章	
(司会)	雇用促進事業団全国勤労青少年会館	
	教養相談部長	
	斉藤茂	
	東洋大学助教授	
	坂口順治	
	千葉大学助教授	
	鈴木春男	

1 調査結果をみて

(1) 実態調査の方法について

司会 「クラブ活動のあり方」について、さきに実施しました、勤労青少年ホームにおける「クラブ活動の実態調査」と「アンケート」の結果と毎年労働省で集計しておられる「勤労青少年ホーム利用状況」を参考にし乍らお話し合いを頂きたいと考えております。

「実態調査」と「アンケート」については、当初各ブロック毎に一定数の調査をしようと考えましたが、第1回の打合会で全く無作為で調査した方が良いだろうということになりました。そのため、毎年勤労青少年ホームから県を通じてその利用状況等が報告されていますが、49年度分の報告があったホームを北から順に番号を付け $\frac{1}{6}$ の抽出率によって抽せんをして対象ホームをきめ44のホームを選び出しました。そしてそのホームにあるクラブを $\frac{1}{6}$ 抽出率によって166選び出したわけです。このようにして選び出されたクラブについて一定期日を定め、ホームに来た順に10名アンケートに答えてもらったわけですが——10名に達しないときは来た人数だけということで処理をしてもらいました。その結果、44ホームのうち39ホームから、166クラブのうち136クラブから返答があり、休廃止クラブが26あったために110クラブの954名からのアンケートが寄せられました。回答率が80%台というのはこれらの調査としては良好なものだと思っています。何かご質問があれば、

鈴木 クラブの選定はホームに委せたのですか。

(2) クラブ員の構成等について

司会 いいえ、こちらに名簿がありますので、こちらで抽せんをして指示しました。

そのため1ホームで3〜4クラブも休廃止というところもありました。

それでは、労働省で集計した資料によると登録人員は女性の方が多いんですが、今回の調査によると実態調査でも女子約51%、男子約49%だし、アンケートも同じになっています。この点からどうでしょうか。

鈴木 登録人員の表をみますと20歳以下に女性が多いということが特徴だと思いますが、一方クラブ活動のアンケートをみますとクラブ活動をやっている人は長期間やっている人が多いという結果が出ておりますからクラブ活動の中心は21〜24歳の人ではないでしょうか、そうすると女性の場合登録面でも段々比率はへってきている。その上、女の方はこの年齢になると結婚等の方に関心が移るためにクラブ活動への関心は薄くなってくるのではないのでしょうか。

坂口 女性はどちらかという自主的なプログラムよりも他律的なプログラムの方へ関心がありますからね。

荻野 やはり女性は、その年齢になると、クラブよりも講座の方に関心が移る傾向があることと、ホームリーダーには男性が多く、男性の方が伸びるのが現実です。

荒井 24〜25歳頃になると男性が女性をそろそろ結婚したらという意味のことで冷かし始めますね、クラブの中には、女性中心のもの例えば講座から発展した料理、茶道等のものもありますが、どんなクラブでも男女が混っていないクラブは殆んどないといっていいでしょう。女性のみ、男性のみというクラブもありますが、数は少しいしあまり長続きしないところが多いですね。私のところでは空手でも女性が入っています。

坂口 編物クラブは女性だけですが、人形クラブのようなところでも、やはり男女の構成になっていますね。

(3) クラブの継続と必要経費について

司会 クラブはやはり、スポーツ、趣味、教養が殆んどですが、結成してから2年以上というのが72%と圧倒的に多く、アンケートでも1年以上というのが約半分を占めています。クラブ活動は永続きするものは永続きし、そうでないものはすぐ消えてしまうのではないのでしょうか、又、アンケートをみても、古い人程出席率がいいですね。永続きするもの程いいといえますかね。

岡本 休廃止クラブが2割あるのは予想以上に多いという感じです。何かクラブの種類別に特徴があるのでしょうか。

荒井 結局は人だと思いますね。良いリーダーと仲間がいいということでしょうね、これはアンケートに出ていますね、又、やはり自発的にクラブを作るようにしなければ永続きしないといえますね。

荻野 必要経費をみてもクラブ員負担が78.1%もあり一番多いのですが自分達の金を出し合

った自主的なクラブの方がやはり伸びますね。

鈴木 クラブによって経費に差がありますか。

司会 ありますね、アンケート結果にもそれは大きな差が出ています。2～300 円のものもありますし6000円を超えているところもあります。

荷井 経常的なものだけではなくて親睦的な経費も入っていますね。

(4) クラブ結成の端緒等について

司会 次に端緒に移りたいと思いますが、講習会からというのが予想よりも少ないというのはどういうことでしょうか。

荒井 ホームの運営のやり方ではないでしょうか、そういうことを柱にしているところと只講習会の数をこなせばよいというところがあるのではないのでしょうか、講習会の先生方委せてなく先生にも理解して教室の運営をして頂くよう努力しなければ駄目でしょう。ホームによって偏りがあると思います。

司会 ホームによっては5つのうち全部が講習会からというものもありますし、クラブが5つあって全くないところもあります。どちらかといえば偏っていますね。

会社クラブ発展というのが少ないですね。

荒井 ホームで生まれたのではないクラブが多いところは、貸館的な運営が行われているということでしょうね。

荻野 講習会からというのは、お花やお茶のようなものは高度の免許をとるため、さらに先生のところへ直接行く人が多くみられますね

岡本 講習会はいわゆる稽古事が多いのですか。

荻野 必ずしもそうはではありませんが、半分位はそうでしょうね。やはり講座のもち方を仲間づくりのためにどうしていくかということが問題ではないでしょうか

坂口 講座をうけに来た人はどうしても受身で仲間づくりというように考えていない人も多いですね。

荒井 私のところでは、講座を仲間づくりの手段として考えていますし、先生方にも始めにレクチャーをしています。終ってから殆んどクラブになりますが、やはり脱落者もいます。

鈴木 講座は個人の技術を磨くというのが多いのではないのでしょうか。そうすると仲間作りというのは難しいのではないのでしょうか。

坂口 やはり普通の各種学校とは違う何か先生とのつながりを大切に何か学ぶことが必要ではないでしょうか、先生に相当影響されますね。

荻野 ホームリーダーからの働きかけが必要だと思います。

クラブ参加の理由はやはり友人からという口コミが多いですね。

司会 次に調査は出来なかったのですが、コーラスのように成程度レベルが同一でないと困るものと、絵のように技能に差があっていいものがあると思うのですが、レベルが違うと困

るものについては新入クラブ員をどういう形でとり込んでいけばよいのでしょうか。

荒井 スポーツでもありますね。人数が多くなければ解決をしますが人数が少なくて固定すると大変ですね。

荻野 ホームはやはり育てるところですから技術が非常に進歩した人は羽ばたいてより高度なところへ行けばよいのではないのでしょうか、やはり、クラブリーダーへの指導が必要ということになりますね。

坂口 やはり人数が大きなファクターになるのではないのでしょうか、また、集団には課題解決集団と育成集団とがあり仲間づくりの育成集団だけでは集団は維持出来ないの、その辺のリーダーのあり方が大切だと思います。

(5) クラブ活動の内容について

司会 クラブの開催回数はやはり週1回というのが多いようですね

荒井 スポーツ関係は週3回ということもありますが、最低、週1回は開催しなければクラブ活動の意味はありませんね。

司会 常時来ている人が統計からみて多いということがいえますね。

荻野 年令と学歴との問題で、今後年令と学歴が高くなりますが、そのときのホームのあり方をどうするかということが気になりますが

荒井 私の方では30歳迄利用させています。現実には25歳から30歳までの利用者は10数%位のものです。問題は他ホームとの交流をやるとリーダーが年をとっているのが目立ちますね

司会 あまり年令差がない方がよいと思います。しかし、それは状況をみて生きた運営をやればよいということではないのでしょうか、その結果がアンケートでも25歳以上の人が12.6%もいるということではないのでしょうか。

岡本 25歳以上の人が利用できるホームに代る施設もない。やはり、必要ならばこういう人達をボランティアとしてホームで利用するシステムを考えるのもいいのではないのでしょうか。

司会 「楽しくするために必要なこと」に対するアンケートとしては、やはり「良いリーダー」「気の合った人達の集り」というのが多いようですが。

鈴木 たしかにそうですが、各項目皆10%前後だということに意義があると思います。クラブ活動に参加する動機が多様なのではないのでしょうか、したがって、市広いクラブ活動が必要だと思います。

司会 他のクラブに入っていないという人が多いですね。

荒井 忙しいんですよ。勤めのあとでやるわけですから1つのクラブで手1杯です。1人で3〜4クラブ入っているのがありますが、そのような人は毎日ホームに来ています。

荻野 バス代等の交通費が馬鹿になりませんしね。ちょっと元に戻りますが、利用者に販売員が少ないのが、気になります。店が遅くまでやっていてホームに来れないのではないかと心配なんです

岡本 販売店になると友達が少ないのでしょうかからホームを知る機会が少ないこともあるのではないのでしょうか。

2 クラブ活動の進め方について考えるべきこと

(1) 無関心層に対する進め方

司会 一応調査結果に基づくお話し合いが終了しましたので、今後クラブ活動はどういう点を考慮し乍ら進めたらよいかということを各先生方からアドバイスを頂きそれに対して意見を交換したいと思います。鈴木先生からよろしくお願いします。

鈴木 ヴェンジャケットで「遊びの研究」という報告書があり、その中で「遊び」をオーガナイズする過程を書いていますので。それを紹介しますと

遊びたいのかどうか→時間があるか→どうして遊ぶか
という意思があるか→やり方、方法を知っているか→
お金が必要か } →仲間が必要か } →場所があるか→用具は必要か } →余暇を愉しむ
お金があるのか } →仲間がいるか } →用具はあるのか } (最後に)

というわけですね。

ホームの行うクラブ活動がどの段階で機能を発揮するかを検討すると、「意思」、「時間」はどうにもならず、「何をどうして」で機能しお金の点ではどうにもならないが、ただ、安く利用できるという点で機能し、「仲間」「場所」「用具」で効果的に機能していると思います。

「仲間作り」のクラブの機能は重大だし、「何をどうして」ということが若い人達にはわからないと思う、この点を指導する必要があります。結局何をしてもよかわからないため、安易な遊びの方に行ってしまうのではないのでしょうか。

荻野 その何をするかということになるとホームでは、クラブ活動として、まずスポーツ等理屈抜きで汗を流すという遊びの方向に持って行くのがよいのではないのでしょうか、そういう意味でスポーツが出来る場を作るというのが必要だと思います。

司会 「意思」のお話しがありました、青少年対策として無関心層をどうするかというのが大きな問題となっていますが、先生の話をきいてしまうと悲観的になるんですかどうでしょう。

鈴木 クラブ活動が地域クラブ活動に発展する傾向にあれば良いのではないのでしょうか、無関心層に働きかける手段としての一方法であると思いますが。

荻野 社会奉仕活動をやるクラブがありますが押しつけではなく青少年自身にその意識を芽ばえさせるというのが仲々難しいようです。

荒井 私のところでは、社会奉仕活動も青年達が自主的にやっていますが、昨年夏には盆踊り大会をやり地元の人々から喜ばれました。ホームを一つの拠点として地域活動を行うという考え方でしょうね。

岡本 勤労青少年ホームだから勤労青少年のみで活動しているのでは十分でないと思います

ね、こちらに勤労青少年、こちらに勤労婦人、こちらに老人のグループがあり、全くばらばらで連絡がないというのではなく、時々何らかのつながりをもつというのが地域としては望ましいと思いますね。

坂口 無関心層に対する考え方としてはホームとしてはやはり来たいという希望者で運営するという割り切り方をするのと同時に、地域の人々にも何らかの形でのアピールするプログラムを作っていくということも必要だと思います。私の経験でも講演会で著名な人を呼んだことがあります、従来とは違った青少年が集ってきたということがあります。

荻野 文化祭という方法もありますね、私のところではお化け大会なんかもやりました。

司会 無関心層だけを対象にするということではなく、範囲を広く呼びかけ関心を示す人を拾い上げるということでしょうね、では坂口先生いかがですか。

(2) クラブと講座との関係とリーダーについて

坂口 ここで出てきた問題として先ずクラブと講座との運営ですね、もっとオーガナイズしていくか、もっとより機能的にしていけるか、ということを出して行くべきでしょうね。あり方といえば指導要綱位を作る位の考え方が必要ではないでしょうか。第2点は、リーダーの問題、良いリーダーというのは必ずよいサブリーダーを持っています。リーダーの選ばれ方、卒業リーダーにならないでメンバーに戻る戻り方を示唆すべきだと思います。

司会 講座とクラブの問題についてはさき出にしましたかどうかでしょうか。

鈴木 今の若い人達は個人主義に徹底していますので、何が自分にとってプラスになるかと考えるわけです。講座が技術習得のためとか楽しいからとかという利害得失から参加する傾向があると思います。そして参加するうちに仲間の楽しさがわかりクラブを育てるということだと思います。仲間の楽しさを指導する指導者がいるかどうかということだと思います。

岡本 講座は仲間づくりのものだということではなく、やはり知識の切り売りでいいというところもあるのでしょうかね

荒井 私のところでは講座はクラブを作るための手段として考えており講師の先生達もホームの講座として特効づけてやって頂き、講座のときからリーダー、サブリーダーを作っていくべきだと思いますね、そしてホームの職員がその考え方で目を離さないことです。

荻野 講座のリーダーにホームの行事の企画に参画させるのがポイントになると思います。

坂口 もう一つ、この座談会で気がついたことですが、クラブ活動のプログラムを考える必要があるのではないのでしょうか、松本ホームでやられている“何でも会”という話を聞きましたが戦後の一時期はYMCAのクラブのようにオールラウンドの時代があり、その後、ダンスクラブというような特定化するようになりました。しかし又、最近はオールラウンドに関心がある時代になってきたと思います。職場からの疎外からの回復のためにクラブに来るんですがそれが特定化してしまうと又クラブから疎外されてしまうということになります。

荻野・荒井 同感ですね

坂口 元へ戻りますが前に中高年の調査で残念だと思っていることは何か、という問いに若いときに資格をとっておけばよかったという答が最も多かった、やはり何かの資格を講座で与えるというのも必要なんじゃないでしょうか。

鈴木 資格をとりたいというので来ている人も無視はできないでしょうね。

(3) OBの活用等について

司会 岡本先生よろしくお願いします。

岡本 講座だけだと比較的優等生的な人が集まることになると思います、それはそれなりの意義があると思いますが、真面目な企画に関心を向けない人がホームにくるキッカケが何かないだろうか。

次にグループの中からリーダーが生れ育って或る年齢になるとやめるケースが多いが、そのような人達をホームの運営に寄与させるシステムを工夫出来ないだろうか、そうすればホームとしても幅広い活動が出来るのではないかと思います。

司会 少し気になりますのが、クラブの中に異質な人がいるとやはりクラブの運営が非常にやりにくいという問題があると思いますが。

岡本 個々のクラブではやはり気の合った人達同志の方がよいと思いますが、ホーム全体としてはいろいろヴァリエティに富んでいてもいいと思います。

荒井 ホームとしても気の合った人たちだけのクラブというのでは存在価値が薄いので、プラットフォーム来た青少年がそういうクラブの中に入って行けるような雰囲気を作ることがホールとして必要だと思います。気の合わない連中とどうやって仲良くするかということがやはり大切なことだと思います。

坂口 ホームのクラブ活動はグループを作り育てることが基本だという考え方で指導員が対処する必要があるのではないのでしょうか。

鈴木 少し気になるのは18歳未満の人の登録は多いのにクラブ活動参加者が少ないということで、もし、ホームに来たけれども何となくクラブに入り難いとか、利用し難いということであれば何か対策を考えなければならないのではないのでしょうか。

坂口 OBの活用で何か具体的な助言はありませんか。

岡本 ボランティアの形で技術を指導するような指導員的な役割をするようなこと等からスタートしたらどうでしょうか。

荻野 仲間作りで出来た人間関係は年齢をすぎた人達の間でも続いておりそのような人人はホームへ遊びに来ています。それが今回のアンケートで25歳以上の人が12%も来ている数字で表われていると思います。

荒井 OB会を作るとするのも一案だと思います。

司会 他に何かご意見がありますか。

荒井 やはりホームへ来ない人達への対策というのは真剣に考え、そういう人達へのアピールということを常に考えて行かなければならないと思います。

それとホームの講座のあり方とリーダーの養成を十分検討しなければならないと思います。

坂口 それと関連してリーダーを養成する人人に対する指導が残っているように思います。

司会 簡単に云いますとホームのクラブ活動は、友達を作る場であるという基本に立ってクラブリーダーがサブリーダーを養成し、単に1ホームにとどまることなく、社会的・地域的な活動の拡がりを考え乍ら、いわゆる無関心層に対する問題をも念頭に入れて推し進めて行くべきだということが皆様の御意見であったと思います。どうもありがとうございました。

5. クラブ活動育成に必要な施策

富士勤労青少年ホーム館長 荻 野 博 章

若者達には無限の未来があり、行動がある。そして、その無限の未来を自ら広げるために、仲間を求める。一日の労働を終え、疲れをふっ飛ばし、友と語り、自からを高める所が勤労青少年ホームである。ホームに集まる多くの若者達の共通点は、働くヤングということだけで、さまざまなクラブ活動を通して、友を得、お互いを見出し、自らの活動を彼等自身で考え、企画し、行動に移している。

この勤労青少年ホームを基点として、クラブ活動育成に必要な施策を考察して行く必要がある。

昭和49年度の勤労青少年ホームの利用状況によれば

(278ホーム)

利用延人員	5,631,106人
1ホーム当り延年間	20,256人
1月間	1,688人
1日	68人

勤労青少年ホームにおけるクラブの利用状況

クラブ数	2,705クラブ
クラブ延利用人員	1,462,498人
クラブ利用回数	139,505回
1回当り利用人員	10人
1ホーム当りクラブ数	13クラブ

スポーツレクリエーション関係

(208ホーム)

708クラブ……26.2%

登山・ハイキング・ホステリング・空手・合気道・卓球・バレー・バスケット・バトミントン・野球・テニス・ソフトボール・体操・ボディビル・柔剣道・その他

軽音楽愛好会・器楽・ギター・バンド・フォークソング・コーラス・詩吟・フォークダンス・社交ダンス・民謡・謡曲・演芸・料理・華道・茶道・和洋裁・美術・文芸・読書・カメラ・書道・ペン習字・囲碁・将棋・手工芸・フラワーデザイン・着物着付・英会話・学習・研究会・その他

全国の勤労青少年ホームで、働く青少年が昭和49年度において、延 563 万人がホームを利用し、クラブ活動においては、延 146 万人の働く青少年が活動している。

この現況の中で、一クラブ平均10名が週一回利用し、全国の勤労青少年ホームで地域の特性に合った多種多様なクラブ活動が、今日も続けられている。

この実態の中で、クラブ活動育成に必要な施策としては、施設面と指導面が考えられる。

第1に施設面では、地域における勤労青少年の域である勤労青少年ホームの施設を、いかに活用して行くかであり、約600m²～800m²の建物の中に、体育室・娯楽談話室・音楽室・図書室・和室・研修室・料理室等が設置され、一部のホームにおいては、体育館等も設置され、各々その利用については、工夫がなされ、運営されている。

現代青少年の価値観の多様化に応ずるべく、彼等と共に考え、実施していくことは非常に、楽しいことであり、文字通り勤労青少年ホームは、地域社会における働く若者達の出合いの場であり、仲間作りの場として、若者達が気軽に出入りし、気軽にくつろぐことができ、趣味・スポーツ・教養・社会奉仕等のクラブ活動を通じて、仲間作りと共に、社会性を養い、明日への労働意欲の助長につながらなければならない。

一般的にホームは鉄筋コンクリートの建物が多く、固い感じであり、気軽に利用できるホームにすべく各々、苦心しているが、私のホームで改善した一例をあげてみよう。

玄関正面のロビーが、物置兼会議として利用度が低く、入り易いソフトなムードを出すべく改善について若者達と話し合い、山小屋風の喫茶コーナーを作ることにきめた。衝立を取払い、床に真赤なカーペットを敷き、幸いに材料は、市の運動公園が整地中であり、その切った丸太と、市有林のオロスキ丸太をもらい、それを夜、若者達と共に皮をむき、彼等が設計し、数週間をかけて、総絵作りの丸太作りの山小屋風の喫茶ヒュッテが出来た。

一つの目的に向かって進むこと、ここで生まれる人間同志のふれあい、共に苦勞することが、ホームでのクラブ育成に繋がっており、これを生み出す経過が、若者との年齢を越えた肌のふれ合いであり、彼等の社会性を引き出すチャンスではないか。

若者達のいこいの場として、楽しい話し合いの場として人気がある。

運営は、若者達で喫茶店に興味のある若者達が集まり、「サークルヒュッテ」として活動している。

サークルヒュッテのメンバーの一人の女性に聞いたところ、「私は栄養士でいつも会社の給

食堂で仕事をしているので、友達と話すことがありません。ここに来て皆と話すことが出来て、とっても楽しみです。」と語ってくれた。

これは一例だが、入り易い、親しみ易いホームにすべく、又クラブ活動に利用し易い施設にすべく、各々、努力している。

クラブ活動の実態調査によれば、

趣味.....	51.8%
スポーツ.....	20 %
教養.....	16.4%
社会奉仕.....	2.7 %

となっている。スポーツクラブの20%と率の低いことは、体育施設面で規模が小さいため、今後の問題点としては、若者がスポーツを通じて汗を流し、仲間作りのできるホームでなければならないと思う。

又最近の若者達は、自家用車の利用も多く100台程度の収容能力のある駐車場を必要としている。

第2に指導面については、「施設の運営は人也」と言われているとおり、ホームの職員（館長・指導員・事務員・用務員）の問題である。

いくら立派な施設であっても、ホームは勤労青少年の仲間作りの場であり、人と人との出会いの場である。若者達に理解をもち、かつ、熱意のある、やる気のある職員でなければ、良い運営は出来ない。

少なくともホームにおける職員数は最低6名を必要とし、青年心理・面接技術等を理解することが必要であり、常に若者達と共に語ることのできる人を必要とする。

常に笑顔で挨拶の出来る職員であってほしいと思う。

ここで重要なことは、職員の処遇の問題である。楽しい職場にすることが、魅力のあるホームにつながっている。特に変則勤務であるため、一般の職員以上に家族の協力がなかったら出来るものではない。職員の処遇については、勤務時間等、種々の配慮を必要とする。一部の職員のギセイの上にホームの運営がなされることは、好ましくない。

次に必要なことは、ホームの運営は、職員のみで出来るものではない。ホームをとりまく、地域の多くの人々、地域のボランティアの理解と協力を求めると共にホームのOBの協力を得ることも大事なことである。

地域に愛され、地域に密着したホームでなければならないと思う。

クラブ活動の中で自分達が楽しみ、喜びを知ると共に、社会の人々にも、その喜びを分つことも大事なことである。

例えば、クラブ活動の中で、公共の場の清掃をしたり、施設慰問をしたり、防火週間中に夜廻りをしたり、チャリティセールをやったり、ホームのクラブ活動を通じての種々の、社会奉

仕活動がなされている。

このような社会性を、彼等から引き出すことも大事だと考える。

次にアンケートの中で、クラブの必要経費の問題だが、クラブ活動の経費を自分達で出しているものが78.1%をしめており、クラブ活動は自分達で企画し、自分達の経費で、自から運営することに意義のあることを、実証している。

クラブ活動は、あくまで勤労青少年自身のクラブで、彼等自身が色々話し合い、協力して活動するもので、職員はあくまでもアドバイス役で、クラブ活動育成のための環境づくりや、適正な助言を、必要とする。

勤労青少年ホームは、青少年の社会人としての成長の過程の場であり、先夏も、ホームのOBが発起人で、夏のキャンプを行い、湖畔で、現役の青少年とOBとの交流が、彼等の手で楽しく行なわれた。OB達も、社交ダンスパーティに夫婦で主賓として招かれたり、赤ちゃんを見せにくるOBもある。ホームの広場には、クラブで知り合って、結婚した若者達の、愛の木が、すくすくと育っている。

ホームにおけるクラブ活動を通じて、友を得、青春の一ページに友情の、思い出を残し、大きく翼を広げて、飛び立っている。次にクラブリーダーの養成も、非常に大事なことで、各ホームの独自研修会、及び、県内勤労青少年ホーム協議会の研修会交流会等を通じて、広く行なわれている。若者達にとっては、未知の世界を知り、友を得ることは、魅力のあることであり、海外研修を通じて、日本を離れて、改めて日本における自分の役割を知ること、彼等の将来にとっても大切なことで、この様な機会を多くの若者達に与え、良きリーダーとして、養成していくことも大事である。

そして、いつの日か、これらの若者達が、次の世代の若者達の福祉のために、努力していくことを願っている。

6. クラブ活動の意義と活動のあり方

千葉大学助教授 鈴 木 春 男

クラブ活動は勤労青少年の余暇活動の中で重要な位置を占めているが、それはいったい何故なのか、勤労青少年がクラブ活動に求めているものは一体何なのか、といった問題について考えてみよう。

現代人はいったい何を求めて生活しているのかという問題は大変重要な問題であるが、それは実のところ年齢層によってかなり異った傾向を示す。ある調査から、年齢別に1位から5位までをあげてみると、それぞれ次のような順序になる。

10代——1. よい友人 2. 知識や技能 3. 自由な時間 4. 健康な身体 5. かね

20代——1. 幸福な家庭 2. 健康な身体 3. かね 4. 知識や技能 5. やりがいのある仕事

30代——1. 幸福な家庭 2. 健康な身体 3. 住宅や土地 4. かね 5. 知識や技能

40代——1. 幸福な家庭 2. 健康な身体 3. 長生き 4. かね 5. 住宅や土地

50代——1. 健康な身体 2. 幸福な家庭 3. 長生き 4. かね 5. 住宅や土地

60代——1. 長生き 2. 幸福な家庭 3. 健康な身体 4. かね 5. よい子供

すなわち、10代を中心にした若年層と、30代以上の中高年層との間には、欲求の対象として考えているものにかかなりの差があり、従って勤労青少年のクラブ活動の意義やあり方を考える場合にもこうした事実を前提として考えていかねばならないのである。

すなわち勤労青少年は、まず友人を求め、知識や技能の習得を強く求めている。自分のやりたいことが自由にできる状況もまたかれらにとっては欲しいものである。こうした点を考えていくと、若い人たちにとってクラブ活動がいかに重要な機能を果しているのかということが明らかになってくる。

いうまでもなく、クラブ活動といってもそこにはスポーツを中心にしたもの、趣味をめぐっておこなわれるもの、教養的なもの、社会奉仕的なものなど、いろいろあるわけであり、それを一まとめにして論ずることには無理もあろうが、一般には参加する本人が、クラブ活動を通じて、友人をつくり、技能を習得し、それを実生活に役立て、あるいは、社会に貢献し、そうしたことを通じて心理的満足を感じている、という点では個人差はあろうが、すべてのクラブ活動がそうした機能の一端を果たしているわけであり、そうした視点に立つならば、クラブ活動をひとまとめにして論ずることも意義のあることだといわねばならない。

クラブ活動の意義という問題について論ずるのに先立ち、第1表により、性、年齢別の余暇

の過ごし方についての実態を見てみよう。とくに若年層において高い傾向の目立つ項目は、レジャー中心の過ごし方、スポーツ中心の過ごし方、および友人・知人とのコミュニケーションである。それに加えてすべての年齢層とも高い傾向を示す項目として、教養中心の過ごし方があげられる。すなわち、若い人たちにとっては、レジャー、スポーツ、教養、コミュニケーション（人間関係）が余暇活動における重点項目だということがわかるのである。

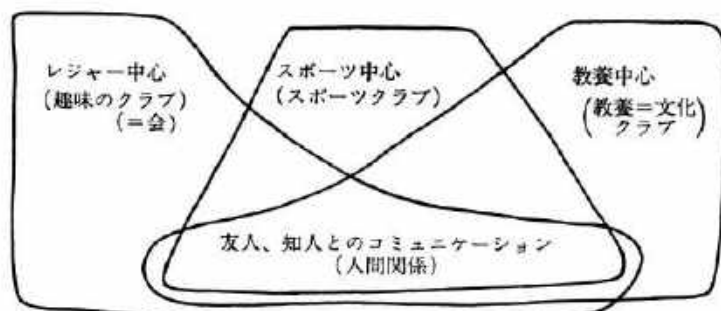
実は、クラブ活動の場合には、この4つの項目が、コミュニケーションを中心にしながら生かされていると見る事ができるのである。もし、これを図示するなら、およそ次のようなものになるであろう。

第1表 性・年齢別余暇の過ごし方

N=全員	全 体		男・年 齢						女・年 齢					
			合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳
サ ン プ ル 数	人	%	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
	1493	100.0	691	42	186	217	159	87	802	55	225	236	193	93
レジャー中心	216	14.5	16.4	23.8	19.4	16.1	14.5	10.3	12.8	23.6	16.4	13.1	8.8	5.4
スポーツ中心	101	1.8	9.6	19.0	11.3	9.7	6.9	5.7	4.4	18.2	5.8	3.0	2.1	1.1
家族のコミュニケーション中心	295	19.8	18.1	2.4	12.4	22.6	23.9	16.1	21.2	3.6	16.4	32.6	20.2	16.1
教養中心	329	22.0	15.2	14.3	13.4	15.7	15.7	17.2	27.9	23.6	28.4	24.6	33.2	26.9
サイドビジネス	80	5.4	5.2	2.4	10.8	4.1	2.5	2.3	5.5	5.5	8.0	7.2	3.1	—
休養中心	323	21.6	24.9	14.3	13.4	24.0	33.3	41.4	18.8	1.8	13.8	14.0	25.4	39.8
友人・知人とのコミュニケーション	112	7.5	7.5	16.7	14.0	6.0	2.5	2.3	7.5	21.8	9.8	4.2	5.7	5.4
そ の 他	32	2.1	2.7	7.1	4.3	1.4	0.6	4.6	1.6	—	1.3	1.3	1.6	4.3
無 回 答	5	0.3	0.4	—	1.1	0.5	—	—	0.2	1.8	—	—	—	1.1

(注) 「His & Hers」より抜粋

第1図 重点項目の相互連関とクラブ活動



すなわち、スポーツクラブは、スポーツを中心に余暇を過ごしなが、同時にコミュニケー

ジョンの場をつくり、温い人間関係を味わっていかうという人たちの集まりであり、文化クラブは教養とコミュニケーションを両立させ、趣味の会は趣味とコミュニケーションを両立させようとする人たちの集まりだと見ることもできるのである。

さて、それではそうした4つの項目に対する性別の差異はどうであろうか。第1表から明らかなことは、スポーツは男性が高く、教養とコミュニケーションは女性、レジャー（趣味）は男女ともに高いことが理解される。同じスポーツクラブ活動をおこなっていく場合でも、女性の場合は人間関係を味わう場としてそれを考え、男性の場合は運動能力向上や体力向上の場としてそれを考えていることがわかるのである。そうしたことから、教養＝文化クラブの場合には、女性向きになることが理解されるのである。

ただ、ここで注意しなければならないことは、それでは男子若年層は教養的なものに全く無関心なのであるか、という点である。現在一般にいわれている教養的レジャー、すなわちお茶、お花……といったものに対しては女性に比較した場合、男性はたしかに関心が低いかも知れないが、そうしたものは別に男性好みの技術的教養ないしは、仕事の場でも生かされる教養というものがあるはずである。

第2表は、そうした点を明らかにするために、毎日新聞社の調査資料から引用したものである。ここからも明らかな通り、一般に女性よりもむしろ男性の方が個人の学習意欲が高いことが推察されるのである。従って、教養＝文化クラブは女性向きと最初から決めてしまうことは明らかに間違いであり、その内容によっては男性を引きつける文化クラブは多いし、また今後そうしたクラブの積極的な開発が志向されなければならないと思われる。

以上、クラブ活動が、若年男女の欲求充足をめぐるどのような意義をもっているかという点について考えてきたのであるが、次に、これからの方向として、クラブ活動がどんな機能を果たしていかなければならないかといった問題についていまいし検討してみよう。

すでに述べたように、男性の場合にはどちらかというと、個人中心的傾向が強く、余暇を楽しんだり、クラブ活動に参加する場合にも、自分の能力アップや体力の向上を中心におき、その意味では個人利害中心的な傾向が強い。それに対して女性の場合には、集団中心的な傾向、すなわち集団の中に身を置いて皆と楽しく、仲良くやっていきたいという風に考える人が多い。従って同じクラブ活動が、それに参加する動機という点から考えると、異った動機で支えられているということがわかる。もちろんこのことは、だから問題だということではない。しかし、時にはクラブ運営にあたって、意見の対立が生ずることが予測されるし、そうした中ではそれをいかに調整するかが重大な関心事になる。

そうした調整ということを考えた場合、個人、人間関係（小集団）というレベルに、第三のレベルとしての社会のレベルを導入することが有効であると考えられる。若い人たちにはとくに自己実現や創造性発揮の欲求が強く、それは別の言い方をすれば、自分が存在し、生きている意味を、自分自身で確認したいということであろう。そしてこのような意味を求める欲求は、おのずから社会的貢献すなわち、自分は社会に対して何ができたか、といった問題につい

第4—5表 過去及び現在学んでいるものについて

過去及び現在学んでいるもの(1)

(首都圏)

	全 体	男・年 齢						女・年 齢						
		合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	
サ ン プ ル 数	1493	100.0	691	42	186	217	159	87	802	55	225	236	193	93
経 理	130	8.7	12.6	4.8	12.4	14.3	15.1	8.0	5.4	3.6	6.7	6.4	4.7	2.2
経 営 指 導	75	5.0	10.3	7.1	9.7	11.1	10.1	11.5	0.5	1.8	0.4	0.8	—	—
法 律	117	7.8	14.3	11.4	39.4	12.4	11.3	13.8	2.2	10.9	3.6	0.8	0.5	1.1
簿 記	246	16.5	20.8	11.9	22.6	22.6	18.9	20.7	12.7	18.2	18.2	13.6	8.8	2.2
統 計	69	4.6	8.4	11.9	10.8	7.8	6.9	5.7	1.4	7.3	1.3	0.8	1.0	—
土地・家屋（不動産）	44	2.9	5.5	4.8	4.3	3.7	6.3	11.5	0.7	—	1.3	0.8	0.5	—
公 害 防 止 管 理 者	16	1.1	2.3	2.4	2.7	2.3	1.9	2.8	—	—	—	—	—	—
中 小 企 業 診 断 士	17	1.1	2.3	2.4	1.6	3.2	1.3	3.4	0.1	—	—	0.4	—	—
電 気	108	7.2	14.8	11.9	16.7	17.5	11.9	10.3	0.7	1.8	1.3	—	1.0	—
無 線	38	2.5	5.2	7.1	4.3	5.5	5.0	5.7	0.2	—	—	—	0.5	1.1
パソコン	51	3.4	6.9	—	8.1	9.2	4.4	6.9	0.4	—	0.9	—	0.5	—
孔 版	26	1.7	1.6	—	1.1	2.3	1.3	2.3	1.9	1.8	2.7	2.1	1.6	—
設計製図（トレース）	78	5.2	10.4	9.5	14.0	10.1	5.0	13.8	0.7	1.8	1.3	0.8	—	—
計 尺	129	8.6	15.8	21.4	22.6	14.7	11.9	8.0	2.5	3.6	4.4	2.5	1.0	—
医 療 健 保 事 務	18	1.2	0.9	—	1.1	1.5	1.9	1.5	1.8	0.9	1.3	2.1	2.2	—
写 真	72	4.8	9.0	7.1	9.7	9.7	8.8	6.9	1.2	1.8	1.3	1.7	1.0	—
速 記	27	1.8	1.9	1.8	0.5	3.7	1.3	—	1.7	3.6	2.7	2.5	—	—
校 正	13	0.9	0.9	—	2.2	—	1.3	—	0.9	1.8	1.8	0.8	—	—
レ タ リ ン タ	41	2.7	3.6	9.5	6.5	3.2	0.6	1.1	2.0	5.5	3.1	1.3	1.0	1.1
ス タ イ ル 画	32	2.1	1.2	2.4	3.8	—	—	—	3.0	1.8	6.7	1.7	1.6	1.1
デ ザ イ ン	51	3.4	3.6	11.9	7.0	2.3	1.3	—	3.2	7.3	6.8	2.5	1.6	—
絵 画	79	5.3	5.5	19.0	7.5	5.5	1.9	1.1	5.1	12.7	7.1	4.7	3.1	1.1
ペ ン 習 字	162	10.9	7.7	14.3	9.7	8.8	5.7	1.1	13.6	10.9	22.7	14.8	6.7	4.3
ボ ー ル ペ ン 習 字	24	1.6	0.9	—	2.7	0.5	—	—	2.2	5.5	2.7	2.1	0.0	1.1

	全 体		男・年 齢						女・年 齢					
			合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳
サ ン プ ル 数	1493	100.0	691	42	186	217	159	87	802	55	225	236	193	93
書 道	335	22.4	17.7	26.2	19.9	12.9	15.1	25.3	26.6	52.7	33.8	21.6	22.3	15.1
文 芸 ・ 文 章	31	2.1	2.5	2.4	2.2	3.2	1.9	2.3	1.7	3.6	1.3	1.7	2.1	1.1
英 文 タ イ プ	102	6.8	4.3	2.4	4.5	5.1	5.7	0.1	9.0	20.0	13.3	8.5	5.2	1.1
和 文 タ イ プ	67	4.5	1.4	2.4	0.5	2.3	0.6	2.3	7.1	5.5	10.7	7.6	4.1	4.3
英 会 話	197	13.2	17.9	7.1	22.6	19.4	18.9	8.0	9.1	23.6	14.2	7.2	5.2	1.1
英 語	265	17.7	22.3	50.0	26.3	20.7	17.6	12.6	13.8	54.5	19.1	9.7	5.2	5.4
英語以外の外国語	99	6.6	9.8	11.9	14.0	9.7	5.7	8.0	3.9	9.1	7.1	2.5	1.0	2.2
ア ナ ウ ソ サ ー	5	0.3	0.1	—	—	—	0.6	—	0.5	3.6	0.4	0.4	—	—
保 母	16	1.1	—	—	—	—	—	—	2.0	—	4.4	2.5	—	—
保 育	34	2.3	0.4	2.4	0.5	—	0.6	—	3.9	5.5	8.0	3.0	1.0	1.1
理 容 ・ 美 容	30	2.0	0.6	—	1.1	0.5	0.6	—	3.2	3.6	1.8	5.1	3.6	1.1
造 園	23	1.5	2.6	—	2.7	2.3	3.1	3.4	0.6	—	0.4	0.4	0.5	2.2
園 芸	90	6.0	6.7	2.4	2.7	7.8	8.8	10.3	5.5	1.8	3.6	3.8	8.3	10.8
手 芸	205	13.7	—	—	—	—	—	—	25.6	21.8	23.9	25.4	24.4	22.6
洋 裁	368	24.6	0.4	—	—	0.9	—	0.1	45.5	20.0	47.1	51.7	52.3	26.9
和 裁 (着 付)	203	13.6	—	—	—	—	—	—	25.3	—	15.6	24.6	36.3	43.0
料 理	288	19.3	2.2	2.4	2.2	1.8	1.9	3.4	34.0	14.5	38.2	43.2	25.9	29.0
お 茶	201	13.5	1.4	—	1.1	3.2	0.6	—	23.8	9.1	22.2	21.9	26.9	35.5
お 花	383	25.7	1.0	—	0.5	2.3	0.6	—	46.9	27.3	51.6	49.2	46.6	41.9
バ レ エ	16	1.1	0.3	—	0.5	—	0.6	—	1.7	3.6	2.2	2.1	1.0	—
日 本 無 踊	48	3.2	0.9	—	0.5	1.4	1.3	—	5.2	7.3	4.0	5.1	7.3	3.2
ビ ア ノ	112	7.5	2.2	7.1	2.2	0.9	3.1	0.1	12.1	30.9	19.1	8.5	7.3	3.2
ギ タ ー	110	7.4	9.8	26.2	15.6	10.6	2.5	0.1	5.2	25.5	7.6	2.5	2.1	1.1

これから学んでみたいもの(1)

(首都圏)

	全 体		男・年 齢						女・年 齢					
			合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳
サ ン プ ル 数	1493	100.0	691	42	186	217	159	87	802	55	225	236	193	93
経 理	51	3.4	4.9	2.4	3.2	7.4	4.4	4.6	2.1	7.3	2.2	2.5	1.0	—
経 営 指 導	58	3.9	7.7	2.4	10.2	10.6	5.0	2.3	0.6	—	0.4	1.3	—	1.1
法 律	40	2.7	4.8	4.8	8.1	3.7	5.0	—	0.9	1.8	1.3	0.8	0.5	—
簿 記	47	3.1	3.0	4.8	3.8	2.8	2.5	2.3	3.2	5.5	4.0	5.1	1.0	—
統 計	12	0.8	1.7	—	2.2	2.3	1.3	1.1	—	—	—	—	—	—
土地・家屋(不動産)	57	3.8	6.8	7.1	9.1	8.3	3.8	3.4	1.2	1.8	1.3	0.8	1.6	1.1
公害防止管理者	18	1.2	2.6	—	2.7	1.6	0.6	2.3	—	—	—	—	—	—
中小企業診断士	21	1.4	2.9	2.4	3.2	3.7	2.5	1.1	0.1	1.8	—	—	—	—
電 気	22	1.5	3.0	2.4	4.8	4.1	1.3	—	0.1	—	—	0.4	—	—
無 線	18	1.2	1.7	—	2.7	1.4	2.5	—	0.7	3.6	0.9	0.8	—	—
ロ ン ヒ ュ ー タ ー	23	1.5	2.6	7.1	2.7	2.8	2.5	—	0.6	3.6	0.9	—	0.5	—
孔 版	5	0.3	0.4	—	1.1	0.5	—	—	0.2	—	—	0.4	0.5	—
設計製図(トレース)	22	1.5	2.2	—	3.8	3.2	0.6	—	0.9	3.6	0.9	0.4	1.0	—
計 算 尺	10	0.7	1.4	—	2.7	1.4	0.6	1.1	—	—	—	—	—	—
医 療 健 保 事 務	35	2.3	1.2	—	3.2	0.9	—	—	3.4	1.8	3.6	1.7	3.6	—
写 真	38	2.5	4.5	7.1	5.9	4.6	3.1	2.3	0.9	5.5	0.4	1.3	—	—
速 記	26	1.7	1.3	—	2.2	1.4	1.3	—	2.1	11.5	2.2	0.8	1.0	—
校 正	20	1.3	1.3	7.1	2.7	—	0.6	—	1.4	5.5	0.4	1.3	—	—
レ タ リ ン ク	37	2.5	2.7	9.5	5.4	1.4	—	2.3	2.2	9.1	3.1	1.3	1.6	—
ス タ イ ル 画	14	0.9	0.4	—	1.1	0.5	—	—	1.4	5.5	2.2	0.8	0.5	—
デ ザ イ ン	34	2.3	2.6	9.5	6.5	—	—	2.3	2.0	5.5	2.7	2.1	1.0	—
絵 画	59	4.0	4.2	4.8	5.4	4.1	2.5	4.6	3.7	9.1	4.4	2.5	3.1	3.2
ペ ン 習 字	123	8.2	5.9	9.5	10.2	6.0	3.1	—	10.2	20.0	11.1	11.0	7.8	5.4
ボ ー ル ペ ン 習 字	43	2.9	3.2	7.1	4.3	2.3	2.5	2.3	2.6	5.5	0.9	3.8	2.1	3.2

	全 体		男・年 齢						女・年 齢					
			合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳	合 計	16 ～ 19 歳	20 ～ 29 歳	30 ～ 39 歳	40 ～ 49 歳	50 ～ 59 歳
サ ン プ ル 数	1493	100.0	691	42	186	217	159	87	802	55	225	236	193	93
書 道	137	9.2	8.1	7.1	5.9	9.2	10.7	5.7	10.1	7.3	11.6	10.2	9.3	9.7
文 芸 ・ 文 章	16	1.1	1.0	1.8	1.1	0.5	0.6	1.1	1.1	—	0.4	1.7	1.0	2.2
英 文 タ イ プ	30	2.0	1.9	4.8	2.7	2.3	0.6	—	2.1	10.9	4.0	—	1.0	—
和 文 タ イ プ	11	0.7	0.3	—	—	0.5	0.6	—	1.1	1.8	1.3	1.7	0.5	—
英 会 話	141	9.4	11.6	9.5	17.7	14.3	6.3	2.3	7.6	14.5	10.7	8.5	4.7	—
英 語	42	2.8	3.6	7.1	8.1	1.8	1.3	1.1	2.1	1.8	0.9	3.0	3.6	—
英語以外の外国語	51	3.4	5.2	4.8	7.5	6.0	3.8	1.1	1.9	12.7	2.7	0.4	0.5	—
ア ナ ウ ナ ー	9	0.6	0.6	4.8	—	0.5	0.6	—	0.6	5.5	0.4	0.4	—	—
保 母	15	1.0	—	—	—	—	—	—	1.9	5.5	2.2	2.1	1.0	—
保 育	5	0.3	—	—	—	—	—	—	0.6	3.6	0.4	0.4	0.5	—
理 容 ・ 美 容	9	0.6	0.1	—	0.5	—	—	—	1.0	1.8	1.8	1.3	—	—
造 園	33	2.2	3.9	2.4	2.7	6.0	3.8	2.3	0.7	—	0.9	0.8	1.0	—
園 芸	65	4.4	6.1	4.8	1.6	7.8	9.4	5.7	2.9	1.8	0.9	2.5	5.2	4.3
手 芸	62	4.2	—	—	—	—	—	—	7.7	9.1	4.0	11.0	8.8	5.4
洋 裁	90	6.0	—	—	—	—	—	—	11.2	36.4	10.2	13.6	7.3	1.1
和 裁 (着 付)	107	7.2	0.3	—	0.5	0.5	—	—	13.1	14.5	16.0	14.4	13.0	2.2
料 理	133	8.9	1.7	—	1.1	2.8	0.6	3.4	15.1	36.4	16.0	15.3	13.0	4.3
お 茶	74	5.0	0.9	2.4	0.5	1.8	—	—	8.5	18.2	11.1	5.5	9.3	2.2
お 花	79	5.3	0.9	—	1.6	1.4	—	—	9.1	20.0	8.9	8.1	10.4	3.2
日 本 無 題	22	1.5	0.3	—	—	0.5	0.6	—	2.5	3.6	0.9	3.4	3.1	2.2
ビ ア ノ	33	2.2	1.2	2.4	1.1	2.3	—	—	3.1	3.6	4.0	4.2	2.1	—
ギ タ ー	55	3.7	2.3	9.5	2.2	2.3	1.9	—	4.9	23.6	5.8	2.5	3.1	1.1
ひ と つ も な い	675	45.2	50.2	45.2	44.6	41.6	57.9	71.3	40.9	20.0	35.1	35.2	47.7	67.7

て追求していこうという方向を生み出す。

若い人たちのクラブ活動が、個性を重視するのか、集団心の高揚を重視するのかで対立した場合には、社会的貢献という第三の要因を加味することによって調整可能になると思われる。スポーツクラブが地域の少年達を集めて技術指導をすることもその一環であろうし、山登りの会が、空きかんを拾う運動を展開するのも、文化クラブが地域の道路標識づくりに精を出すのも、みなこうした傾向を示すものであり、このことによってクラブ活動はより充実したものになっていくと思われるのである。

クラブ活動のあり方をめぐっては、この他にも、専門的傾向を深めるべきか、同好会傾向にとどまるべきか、という問題も重要な問題として存在しているが、最終的には、そのクラブを構成している個人の意志が積極的に生かされるということが大事なのであり、自主的、自発的な組織である以上、その組織の目標は、その構成員のすべてに承認されていなければならない。ということは、同好会か専門クラブかという立場のちがいは、結論的に言えば同好会を好む人は同好会をつくって運営し、専門クラブを欲する人はそれを作って技術向上に励むということが要望されるということであろう。

現代社会の中でわれわれは、社会生活の不安を解消したいという欲求を強く感じ、そうした中から、心の安らぎが得られる「共同組織」をつくりたいと欲している。とくに中小零細企業で働く勤労青少年の場合にはこの傾向が強い。クラブ活動がこうした人たちに真の安らぎを与えるような姿で運営されることが望まれるわけであり、そうした真の安らぎは、人から与えられて得られるものではなく、自分たちみずからが、自主的につくるものだ、という認識が一般化することが切望されるのである。

7. クラブ活動の経過観察と 指導者のあり方

東洋大学助教授 坂 口 順 治

I クラブ活動の2つの側面

クラブ活動には必ず2つの機能がある。ひとつは、クラブ活動の目標を達成していこうとするはたらきである。たとえば合唱サークルに例をとれば、練習に練習を重ねて、コンクールに出場をし、入賞することが最大の目標として活動することもある。この場合、サークルのメンバーは、楽しんで合唱していききたいという個人的な参加態度よりも、きびしい練習を重ねてその成果を世に問うというとらえ方が必要である。いわばメンバー個人をはなれたところに成果を求めて活動するサークルとなってくる。

同じ合唱サークルであっても、これと反対にコンクールに出場するとか発表会のステージをもつとかといった外部に活動の成果を発表するというを好まないサークルもある。合唱技術の向上をめざした成果を世に問うことよりも、合唱サークルに参加して、楽しいハーモニーをつくりだすことに価値をおいて活動する合唱サークルである。この場合、メンバー各自は参加することに意味があり、合唱の楽しさを味わう過程に価値をおき、個人の精神的な充足をはかることに重点をおく。つまり、クラブ活動は個人の向上をはかりよりよい社会生活への適応をしていくための手段としてのほたらきとなる。これがもうひとつの機能的側面である。

実際的な活動においては、こうした2つの側面がきりはなされてあるのではなく、相互に補いあっているのが実状である。クラブ活動の重要な点は、この2つの機能が統合されたかたちで発揮していくことが望ましい。とくに勤労青少年ホームで展開されているクラブ活動は、メンバー間の相互の親睦と資質能力の向上をはかりながら、同時にクラブとしての活動の成果がもたらされることが大切である。その理由は、単に個人の自己完結的な楽しみや能力の向上という個体内にとどまる関心と欲求を充足させるためにホームが存在しているだけではなく、さらにすすんで、クラブ活動が、個人の関心や欲求の充足から脱皮して、個人を離れた集団としての成果を産み出していくという創造的な活動が勤労青少年福祉にとって大切な側面として強調されるからである。いわば、成長志向集団のほたらきと同時に課題志向集団としてのほたらきを統合していくクラブ活動が、勤労青少年にとって有意義なものとなるのである。

第1表は、クラブ活動の2つの側面を比較した表である。この表でも示しているように、集団活動が意味をもつのは、個人がクラブ活動にどのような態度で参加していくかによって変化するものであり、同時にその時のリーダーシップのとらえ方によっても変化していくことを示唆している。

第1表 クラブ活動の2側面

課 題 志 向	成 長 志 向
・個体外成果に価値をおく（クラブ活動の成果は個人から独立している） ・個体内成果は主目標達成に寄与するかぎり尊重する。 ・直接指示型のリーダーシップが多く、目標達成を重視する。	・個体外成果は必要なとき的手段的価値として用いる。 ・個体内成果に価値をおく。（個人の向上、よりよい適応能力など個体内にとどまるものに重点をおく。） ・間接援助型のリーダーシップが多く、個人の価値、規範の内在化に力点をおく。

Ⅱ クラブ活動の経過

クラブ活動のはたらしは課題（目標達成）志向と、成長志向のあることを述べ、その統合をはかることが重要な運営の基本であると考えられた。

さて、つぎにメンバーが集まって、クラブ活動が成立してから発達して成熟した健康なクラブ活動として存続していくための過程を考えていこう。

クラブ活動は言うまでもなくメンバー間の人格的な相互交流を通しながら、成果をあげることにある。そのためには、まず第1にメンバー間の情緒的感情的連帯が成立していなくてはならない。情緒的連帯とはメンバー同士がお互いに自由に話しあい交流できるような雰囲気をもっていることであり、それによってお互いが信頼できる間柄関係をもつことである。ビオン（Bion, W., イギリスの精神分析学者。集団心理療法の理論家）は、クラブができるためには基礎集団としての情緒的信頼関係の結びつきができていのかどうかを診断しなくてはならないことを強調している。メンバー間の情緒的連帯はクラブ活動としては表面にあらわになってこないような個人の内部の感情や意識であるから、深層面が多い。したがってつい見逃がしてしまうのであるが、この連帯意識が十分に成立していなければ、いくら活動を行ってもその実りが少ないと述べている。キブ（Gibb, J., アメリカの集団心理学者。実践的な活動の指導者としても有名。YMCAなどのコンサルタントもした。元コロラド大学教授）も視点が異なるけれども、クラブ活動の出発点として、メンバー間の受容関係の樹立とコミュニケーションの流れをよくすることが大切であると強調している。それはメンバー間の中に猜疑心をもったり、信頼できないような感情をもったまま活動していくならば、必らず失敗が生じるのであって、お互いが腹藏なく交流できるコミュニケーションのネット・ワークをつくることと、相互信頼

の形成を重要視する必要があることを説いている。

このようにクラブ活動の出発点として考えなくてはならないことは、参加メンバー間の相互信頼の形成である。

そこで筆者は次のような段階をおいて、クラブ活動の集団的發展過程をとらえている。

a. 初期

メンバーが参加しようとする段階で、クラブ自身も発足して間もないために目標も定まっていないし、メンバーもよく知らない。個人にとっては、クラブ活動に対してある種の期待をもっていると同時に不安感が充満しているであろう。この時期のメンバーの行動の特長をみると主として次のような行動があらわれている。

- 相互に名前を知らないでいる。
- 参加の動機はあるが、はっきりとした期待感となっていないで、むしろ不安感もただよっていて、落ち着かない気分である。だから一見参加の熱意に欠けているように思われる。
- 発言の場合人の顔をうかがいながらものを言うことが多い。
- メンバーは何をどのようにしてよいかわからないままにいる。
- そのクラブ活動のことについての質問が多くで、自分でつくっていくクラブというよりも、他人にまかせていくクラブという感じにいる。
- リーダーに何でもしてもらえという依存性がつよく、自主性に欠ける。
- メンバー間では、十分に交流していないために疑心暗鬼で信頼できない状況である。
- クラブで会話される言葉使いは、よそゆきの言葉がつかわれる。

そこで、こうした期待と不安とが交錯した初期の段階では、指導者はどのような行動をとることが望ましいであろうか。指導者の役割を列記してみると次のようになる。

- メンバーをくつろがせるような雰囲気をつくる。
- メンバーが早くそれぞれの名前をおぼえて交流をするように取り計う。
- メンバーの発言を、どんな些細なことであっても尊重する。
- メンバーの間で相互に反応しあえるように話し合いの発展や交流を促進させる。
- メンバーに対して誰にでも公平に接するように努力する。
- 権威者ではなく、しかし援助者というよりも指示していくようにリードする役割がある。

（メンバーが自主的に行動するまでには至らない状況であるから、不安感が解消するまでの間は指示的なリードで活動をすすめていく役割が課せられているとみるべきである。）

このような指導者の役割がはたされてのち、メンバーも徐々に自分の行動をとりだし、クラブ活動の目的と自分の参加目的との統合や、自主的な行動が目立ってくる。

b. 上昇発展期

この時期はメンバー個人の自由な行動がみられる傾向がつよくなり、集団としてのまとまりが顕著にあらわれてくる時期である。メンバーの行動の特長を列記すると、

- メンバーの顔ぶれがきまってくるようになる。（出席者が固定してくる）

- メンバー同士の話し合いが活発になってくる。
- メンバーの発言も次第に発声音が高くなってくる。
- メンバーに不安感や神経質的な感じが減少してくる。
- メンバー間に「われわれ」という言葉が多くなってくる。
- メンバー間の中で責任分担が行われるようになってくる。
- あだ名で呼び交わされるようになる。
- クラブのシンボルやニックネームをほしがる。
- 自主的な態度のあらわれがみられる。
- ときには自由にふるまうメンバー間に対立が生じたりすることもある。
- メンバーの行動がクラブ活動の方針に同調していくようになる。

こうしたメンバーの行動をみながら、指導者はどのような役割をはたしていけばよいのであろうか。指導者の役割を列記すると次のようになる。

- 指導者は、前の段階のように指示的にはならず、一歩退いた態度で接することが必要になる。
- メンバーが責任と役割とを公平に分担するようにすすめる。
- 急速なクラブ活動の展開をしていこうとする力がでてきた場合には、クラブの能力以上のはたらきをしないようにしむける。
- クラブ活動の組織形成を援助していく役割をもつ。
- メンバーの中からリーダーを育てるように心がける。
- メンバー間で対立したり失敗などがあった場合には、それを意味ある方向へとしむけるようにする。

というように、活動が活性化してくるとクラブ活動も自主性をもち、新しい方向を探索しながらすすんでいく。こうした段階においては指導者のあり方は、前のように「指示的」な役割をはたしていると、メンバーからの反撥をまねくだけである。クラブ活動の発展にともなって、指導のあり方も変化していくことは言うまでもない。この上昇発展期においては、クラブ活動自体の自律的な活動を援助し支えていくための「支持的」な役割があると言えるのである。

c. 安定期

クラブ活動がもっとも安定した形で、活発な活動のできる時期である。いわば活動期とも呼べる段階である。

この時期のメンバーの行動の特長をあげていくと、

- クラブの大きさが活動の目的を達成するためには適当なサイズになる。(人数が多い場合にはサブ・グループなどを編成している)
- どちらかと言えば、新しいメンバーを入れることをあまり欲しないでいる。
- メンバーの参加は、その能力に応じて最大に発揮されるようになる。
- 他のクラブとの交流を好み、自分たちの能力を確めることも多い。

- クラブは活動の目標を自ら決定し、プログラムを計画し、その遂行をする。
- クラブ活動に新しい規範が成立して、メンバーはその規範を自らのうちに守っていくようになる。

このような行動的特長があらわれて、クラブ活動は充実したプログラムが展開される。そこで、指導者はどのような役割をはたすものであろうか。その役割の主なものをあげてみると次のようになる。

- メンバーの自主性と協調性が尊重されるように援助していく。前段階よりも、多くの責任がグループによって担うように援助する。
- プログラムがマンネリ化しないように注意をする。
- クラブ活動が排他的、利己的にならないように配慮する。
- 新しいメンバーを心よく迎え入れるように配慮する。
- 地域社会の中での活動の意味を知るような努力をする。

といったような指導のポイントで支援していくことが必要である。こうした配慮は、指導者がリードしていくというよりも、クラブ自体がメンバー各自の責任のもとに創造的な活動を推進していくことを支持していくことであって、課題志向と同時に成長志向も十分な機能をはたしていく活動になってくるのである。

こうした3つの段階は、クラブ活動の発展過程を示すと同時に指導者のリーダーシップのあり方の変化をも柔軟に行うことの大切さを示しているものと言えよう。第1図はクラブ活動の

第1図 クラブ活動の経過と指導者のあり方

初 期	上昇発展期	安定充実期
指導者の責任	メンバーの責任	
指示的指導	支持的援助的指導	協働的指導

発展過程とリーダーシップのタイプを図示したものである。ここでは、指導の仕方がクラブの発展過程に即応した指導性を発揮することの必要性を示唆している。

さて、クラブ活動はいつまでも充実した安定期が続くものではない。次第に衰退期を迎えることにもなる。その徴候としては次のようなものがあげられよう。

- メンバーの出席率が低下する。
- 関心や興味がうすれていく。
- 新しいものに対するメンバーの熱意が減退していく。
- クラブ活動をリードする人がごく少数の人に限定されてくる。
- メンバーの出入りはげしくなる。
- 新しいメンバーは殆んどみられない。

○ 積極的なメンバーがいなくなってくる。

というように、熱意に欠け積極性がみられなくなってきたとき、クラブ活動はもう一度総点検が必要であり、新しく生れ変わったクラブへと発展的解消をしていく方法をも考察する必要がでてくるであろう。

Ⅲ クラブ活動の経過を観察し診断する資料

クラブ活動の経過を3段階にわけてその行動特長をのべてきたが、ここでは各段階における指導を効果的にするための観察のポイントの一覧表を例示してみよう。

クラブ活動の動きを観察するための基本的要件は、メンバー間の信頼関係の形成具合、コミュニケーションの流れ具合、目標達成のための努力具合、役割分担の組織のでき具合の4点から行う。

a. メンバー間の信頼関係

a-1. メンバーが率直に話し合っている雰囲気はどの程度あるか。

1 2 3 4 5 6 7

(右側ほどその程度が高い。4は中間、左側は低い。)

a-2. メンバーは恐怖感をどの程度いだいているだろうか。

7 6 5 4 3 2 1

a-3. メンバーはどの程度、自分に自信をもっているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

a-4. メンバー間にどの程度相互受容的な配慮がなされているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

a-5. メンバー間の中で、他人を非難したりあげつらったりする行動はどの程度あるだろうか。

7 6 5 4 3 2 1

b. コミュニケーション

b-1. メンバー間に見せかけの会話がどの程度なされているだろうか。

7 6 5 4 3 2 1

b-2. メンバー間にかたよったコミュニケーションがなく、どの程度自由に交流されているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

b-3. クラブの上の人に対しても下の人に対してもどの程度、活発にコミュニケーションをしているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

b-4. メンバー間でどの程度率直なフィードバック(コミュニケーションの確認)を行っているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

b-5. メンバー間でどの程度あからさまに感情や心の葛藤を表現しているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

C. 目標達成

C-1. メンバーが、どの程度真剣に課題と取り組んでいるだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

C-2. メンバーは課題を達成するために、どの程度積極的に協力しているだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

C-3. クラブとしてみるとき、どの程度創造的な活動がなされているであろうか。

1 2 3 4 5 6 7

C-4. メンバーはどの程度自主的な態度と行動で目標達成に取り組んでいるだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

C-5. メンバーは、どの程度つよく責任感をもって目標達成に取り組んでいるだろうか。

1 2 3 4 5 6 7

D. 役割分担と組織性

D-1. メンバーはそれぞれ自分の役割をどの程度はたしているであろうか。

1 2 3 4 5 6 7

D-2. メンバーはどの程度、形式にとらわれずに、有効な役割をはたしているであろうか。

1 2 3 4 5 6 7

D-3. クラブは、必要に応じて、どの程度柔軟に組織の形態を変えていくことができるであろうか。

1 2 3 4 5 6 7

D-4. メンバー相互はどの程度ふかく信頼し合ってお互いの役割を相互に助けあっているであろうか。

1 2 3 4 5 6 7

D-5. メンバーは、どの程度つよく地位や権力への関心があるだろうか。

7 6 5 4 3 2 1

以上の観察項目をチェックして、各群（a, b, c, d）それぞれ合計の点数を算出し比較してみる。平均点（各群20点前後）であるならば、このクラブ活動は上昇発展期にあって、指導者の有効なリードによって安定した活動期へと進むことができるのである。平均点が25点以上を示す場合には大体においてクラブ活動が順調に進んでいることを示すものと診断してよい。ただし、各群に平均点に増減があったり項目によっては極端な差異のあるときには、低い項目や群についての再検討が必要である。一般に a, b の二群の平均値が C, D の値よりも高い場合には、そのクラブ活動は、成長志向的方向性をもっていると言えるであろう。反対に、C, D 群の方が高い場合には、課題志向的方向性をもったクラブ活動であると考えられるであろう。理想的なあり方としては、各群平均的に高点分布の観察が望ましいわけであるが、この観察リストはクラブ活動のどの局面が不足しているかなどをとらえるのに便利である。それによって、指導者のあり方も、柔軟性をもって、しかも効果的に導くことができるのである。

8. クラブ・リーダーの資格と役割

雇用促進事業団職業研究所 岡 本 英 雄

○勤労青少年クラブ活動の特徴

地域における勤労青少年クラブ活動の現状については既に述べられているが、ここではクラブ・リーダーを論ずるのに必要な点を改めてとりあげておくことにする。

ここでとりあげているのは全国の勤労青少年ホームを活動の場としているクラブであるが、今回の調査によれば1つのクラブの規模は平均20名である。これは構成メンバーの数であり、全員が常時参加するわけではなく1回ごとの参加人員は13.1名である。これは労働省がまとめた49年度の勤労青少年ホームの利用状況調査の10人とはほぼ一致している。同調査によればスポーツ関係のクラブでは参加者はバレー、バスケット、バドミントンがやや多いのを除くと、ほとんどが10名前後となっている。これに対して、趣味教養等のクラブでは4、5名のクラブが少なくなく、人員数のバラつきが大きくなっている。

クラブ活動の内容は上述のようにスポーツ関係と趣味・教養等の関係に大別されるが、リーダーを論ずるためにはこれとは異なる分類が必要であろう。すなわち、音楽関係のクラブのようにメンバー間の相互作用がその活動の特質上、比較的濃密なクラブと、着物着付のように特にメンバー間の密接な相互作用が必要でないクラブに分類することができる。

年齢構成をみると20歳～22歳が43%、23歳～24歳が31%となっており、年齢的にはかなり幅の狭い集団であることを示している。

クラブは結成してから2年以上経過しているものが72%で大半を占めるが、49年度の資料にもとづきサンプリングした166のクラブのうち26が休廃止と報告されており、寿命の短いものも少なくないことが示唆されている。

クラブへの参加は個人の自発的な意志によっていることはもちろんである。

以上を要約すると、ここでとりあげるクラブは、青少年が会員である小集団で、余暇活動を目的としており、またボランティア・アソシエーションで、その寿命にはややバラつきがみられる、ということになる。

○クラブの機能とリーダー

リーダー・シップのありかたは、その集団がどのような機能をもっているかということと密接な関係をもっている。機能は顕在的機能と潜在的機能とに分類できる。まず顕在的機能とは、そのクラブが意識的に目的として掲げているものであって、スポーツ関係のクラブでは当

該スポーツのプレイ、あるいはそのための技能の習得ということになる。趣味・教養関係でもそれぞれを習ったり、楽しんだりすることが顕在的機能である。

一方、潜在的機能とは目標として明示的に掲げられてはいるが実際に成員をひきつけている機能であってこれら青少年の余暇におけるクラブ活動では主として、友人関係をつくり出し、維持し、発展させることにあろう。また、成員に明確な帰属意識をもたせ、心理的な「礎のおろし場所」となることも重要な機能である。異性との交際場を提供することなども潜在的な機能といえるであろう。マッシューズ（イギリス青少年指導の実務家ユース・クラブ・リーダーシップという著作がある）によれば、親でもなく、また権威の代表者（企業の上司など）でもない大人に会えることも、この種のクラブの重要な機能である。

この両種の機能を満足するようにクラブを運営していくことのできるリーダーが、良きリーダーということになるが、クラブの機能を成員に対する機能に限定して、もう少しわしく見てみよう。

成員個人に対する集団の機能は、個人の側から考えると、参加する動機の分類ということになるが、カートライトとザンダー（両者とも、アメリカ、ミシガン大学の社会心理学者）にしたがえば、つぎの4つになる。

- (1) 集団生活が個人的目標を達成する手段となっている場合
- (2) 集団生活それ自体に魅力を感じる場合、
 - (a) 集団の活動に魅力を感じる場合
 - (b) 集団の成員に魅力を感じる場合
 - (c) 集団の目標に魅力を感じる場合

ただし、これらは重複してあらわれる場合が多いし、また集団生活を続けていくうちに変化していくものである。

個人的動機(1)は手段としてクラブを利用するもので、どの種のクラブにも見られるものである。しかし、料理や着物着付、華道、茶道、和・洋裁などではとくに多くみられる動機である。これらの動機をもつ入会者が、クラブのメンバー間の相互作用が余り必要でないクラブに入会したときには、動機の変化がおこることが少なく、一定の技能・知識を習得したときに退会していくことになる。このようなクラブにおいてはクラブ・リーダーの必要性はほとんど感じられないのが普通である。技能知識の専門家として講師がいれば事足りるのである。クラブ・リーダーがたとえいたとしても、それは名目的なものであって、政策立案、内部関係の調整や統制といったリーダーとしての実質的活動を伴わないことが多い。

技能・知識の習得を主たる目的として入会しても、そのクラブでメンバー間の相互作用が密であれば、入会者の動機は(1)から(2)、すなわち集団の活動や成員に魅力を感じて参加するように変化していく可能性が大きい。クラブの種類でいえば英会話など習得に比較的時間のかかるクラブにおいて、このような参加動機の転化がおこる可能性が大きい。この転化をおこさせるためにはクラブ・リーダーのありかたがかなり重要なファクターとなると考えられる。

一方、集団活動そのものに魅力を感じて参加してくる個人を、クラブ活動の積極的な成員とさせることは手段的動機をもって参加してくる個人の場合より容易である。しかし、動機が動機であるから単にあるスポーツをやるといったことではその欲求を満足させることができない。クラブ活動の中味がより問題となるのである。スポーツや趣味を活動内容とするクラブに、この種の参加者が多いと考えられる。クラブ本来の活動に対する要求が他の場合より強いので、リーダーはそれに充分応えなければならない。

集団の成員に魅力を感じて入会するものは比較的少いであろう。むしろ、これは会員であることを継続させる動機として働くことが多いと思われる。しかし、入会の動機として「友人にすすめられ」という回答が最も多いことなどから、補助的な動機ではあるかもしれないが、入会の動機的一端となっていると推測される。この動機に関しては、リーダーのありかたが関係する度合は低い。

最後の、集団の目標に魅力を感じて、というのは余暇活動を中味とするクラブではほとんどみられない。これは政党や社会運動団体に比較的多くみられるものであって、活動自体よりも、その団体が掲げているスローガンへの共鳴から参加することを指す。

したがって、クラブにおけるリーダーは、集団の活動に魅力を覚えて入会してくる成員の動機を満足させるべく活動の内容を充実させることと、手段的動機から入会してくるものを活動自体に関心を向けさせることがその役割ということになる。

○クラブ・リーダー、講師、ホーム職員

クラブをリードしていく役割を担う人として、クラブ・リーダー以外に講師（あるいはコーチ）とホーム職員とが考えられる。

まず、クラブ・リーダーと講師やコーチの差異について考えてみよう。両者の果す機能はリーダーがクラブのまとめ役として全般的な役割を果すのに対して、講師らは主として専門的知識、技能を与えることが任務である。また、リーダーはクラブ内の人間と成員によって考えられているのに対して、講師らはクラブ外の人間と受けとめられていることが多い。これらの差異のために、リーダーは全人格が問題になるのに対して、講師らはその一部だけが問題とされる。

もとより、講師らも単にその専門において秀れているというだけでなく、リーダーとしての魅力も兼ね備えていることが望ましいことではあるけれども、必ずしも必要なことではない。彼らがリーダーシップを完全に握ってしまうのは青少年のクラブ活動という趣旨からすると、やや逸脱した方向であろう。

クラブのO・Bが指導者となることは望ましいことであろう。青年期を終わったクラブ・メンバーが活動する適当な場がないことは重大な問題であるが（それ以前に時間等の面で彼らには余裕がないことが多いが）、彼らがボランティアとして指導者となるのは地域社会におけるクラブ活動という視点から考えると極めて望ましいことである。

ホーム職員とクラブ・リーダーの差異も、クラブのアドバイザーであるか、クラブの会員であるかという点が最も重要である。ホーム職員はあくまでクラブの運営がスムーズになされるように助言を与えるのであって、リーダーシップをとるものではない。

ただし、個々のクラブの運営でなく、ホーム全体の運営に関してはもちろんリーダーシップをとることが必要となる面がある。また、職員はクラブ員らを良く理解することは必要であるが、同化することは必要でもないし、望ましいことでもない。さきに述べたように、親でも上司でもない大人と接触することのできる場、というのがホームの存在理由の一つであろうからである。世代の違いは違いとして認めた上で、協調していくことが必要なのである。

○リーダーの資格

集団のリーダーが他のメンバーと異ったいかなる特性をもっているか、ということの問題とした研究は数多いが、余り実り多い結果をもたらしたとはいえない。すなわち、調査ごとに出てくる特性がバラバラであり一般化が難しいのである。どの調査においてもみられたリーダーの特性としては知能があげられる程度である。しかも、単にバラバラであるだけでなく、互いに矛盾するような特性（たとえば、攻撃的性格と温厚さなど）がでてくるものが少なくないほどである。

どのような人がリーダーになるかは、その集団の存在理由に応じて異なってくる。さらには、同一集団においても、その集団がいかなる局面に立っているかによって異なる。

もう1つリーダーに関して重要なのは、1つの集団には1人のリーダーしかいない、とは限らないことである。むしろ、複数存在することのほうが普通である。それぞれ、集団の維持、発展に必要な機能を分担するのである。

したがって、我々はこちらでもう一度、ここでとりあげているクラブの集団としての特徴をふり返ってみて、それとの関わりの中でリーダーをとらえなければならない。

まず、これらのクラブは小集団であることに注目すると、そこではフォーマルな役割分化はあまりみられないと予想される。せいぜい、会長、副会長、それに会計係程度であろう。そして、それらを選任する基準も明確なものではなく、ソシオメトリックな基準によって選出されることが多い。

また、ボランティアな集まりであることも上に述べた傾向を補強する。つまり、環境からの制約が比較的少ない集団であるから、純粋に成員間の相互評価によってリーダーが決定される傾向がある。

クラブの寿命にバラつきがあるのは、成員の年齢層が限定されていていつまでもメンバーであることを継続できないことと、ボランティアな組織であることから派生することで、リーダーのありかたに与える影響は少ない。

最後に、活動の内容が余暇活動であることだが、これはリーダーのありかたに大きな影響を与える。

集団の成員の行動の機能は、大別すると(1)集団の目標達成のための機能と、(2)集団の統一維持の機能とに分けることができる。そして、この2つはそれぞれ異なるリーダーシップを要求するのである。

目標達成に関してのリーダーは

- (1)関連した知識をもつ
- (2)想像力に富み、革新的である
- (3)实际的であり、現実的である
- (4)説得力に富む
- (5)問題を構成したり、討論をまとめるのが上手である。
- (6)計画を立て、組織立て、機能の調整にたけている。

と他のメンバーに認められている。

これに対して、統一維持に関連するリーダーはこれほど定型化されていないが、要するに集団内の人間関係を処理するのにたけていることが強調される。

この2つの機能はどの集団でも必ず満たされる必要があるが、集団として目標達成的な集団か、統一維持的な集団かを区別することができる。

一般にアソシエーション、すなわち特定の目標を遂行するために組織された集団においては目標が明確化されているので、この両者の区別はつけやすい。しかし、余暇活動としてのクラブ活動ではこの区別が微妙である。というのは、そこでは集団として活動する(その内容は何んでもあれ)こと自体が主要な目的となっていることが少なくないからである。集団の凝集性を高めることが、集団の目標である、というケースは少なくない(たとえば「何んでも会」といった、目標を特定化しないものが、かなりのメンバーを集めている)。

目標達成的な集団においては、目標達成機能を担うリーダーが集団維持的機能を担うリーダーより優位であり、統一維持的集団においてはその逆である。そして、クラブは統一維持的側面がかなり強いので、人間関係志向的なリーダー、社会的、情緒的な問題処理するのに優れたリーダーがクラブを代表する可能性が強い。具体的には、次のような特徴をもったリーダーである。

- (1)暖かさ、友好性をもつ
- (2)調停し、葛藤を解決し、緊張を緩和する
- (3)個人的援助、助言、勇気づけを与える
- (4)理解、異なった見解への寛容を示す
- (5)公平公正であること

○家庭、地域社会、企業との関係

ある分野での活躍と他の分野での活躍との関係について2つの対立する見解がある。一つは、ある分野で活躍するためには、他の分野でも活躍していることが必要だとするもので、波

及説とでもいうべきものである。他の見解は、ある分野で活躍できないために他の分野で活躍するようになるというもので、補償説といえよう。

クラブ活動と他の集団との関係をこの2つの見解と関連づけて考えてみよう。

まず第1に家庭との関係であるが、一般的に言えば青少年は全て境目的な位置にいるといってよいであろう。すなわち、親の庇護から脱けだしつつあり、しかも、まだ自分を中心とする家庭を形成するには至っていないからである。多くの場合、自分の家庭をもつようになると、クラブ活動からは遠ざかっていく。

地域社会については、ほとんどその実体が崩れているので、青少年、大人を問わず有意義なアイデンティティを支える機能をもっていない。むしろ、ホームそのものが地域社会的な色彩をもつ数少ない組織である。

企業との関連は簡単ではない。成員は男子の場合はブルーカラー、女子は事務員が多く、これに店員が続いている。彼らがどのような労働状況にあるかはっきりしないが、クラブの成員全体を考えればそれほど恵まれた状況にあるとは考えにくい。

しかし、その中のリーダーはあるいは職場においても比較的能力を発揮でき、自発性が重んじられるような状況にあるかもしれない。この点は今後の研究課題である。

〇む す び

リーダーが果たす可能性のある役割としてクレッチ（アメリカカルフォルニア大学の社会心理学者）は、つぎのような項目をあげている。

- (1) 執行者……集団内の諸活動を最終的に調整し、諸決定の執行を監督する。
- (2) 政策立案者……集団の目標や政策の確立
- (3) 計画者……目標達成のための手段方法の決定。
- (4) 専門家……目標達成に必要な専門的な情報や技術の提供者。
- (5) 対外的代表者……外部との関係における、集団の代表者。
- (6) 内部関係の統制者……集団内部の人間関係の統制者となる。
- (7) 賞罰の執行者……成員に対して賞や罰を与える権限をもち、それによって集団を統制する。
- (8) 調整・仲裁者……集団内の葛藤の調整と仲裁の役割
- (9) モデル……いかにすべきかを具体的に体現することでモデルとなる。
- (10) シンボル……集団の統一の中心であり、精神的支柱となる。
- (11) 身代わり……成員たちが責任回避してリーダーに一任したことを、成員たちにかかわって引受ける。
- (12) 規範者……集団の信念、価値、規範などの源泉、提供者
- (13) 理想像……成員たちの望ましいという気持ちの中心とされる。
- (14) 犠牲者……集団としての失敗や欲求不満のはけ口として、リーダーが成員たちの攻撃の

標的となり、いけにえになる場合。

ここに掲げたリーダーが果たす可能性のある役割は集団一般を念頭においてつくられたものであり、青少年が余暇活動をおこなうクラブにおいては、このうちのいくつかが比較的 重要であり、頻繁にみられるものである。

まず(4)の専門家の役割はクラブリーダーにはそれほど強く要求されない。同年輩であることの多いクラブリーダーには求めても無理なことが多い。この役割は外部のコーチ、講師、ホーム職員らに求められる。

(1)～(4)は主として課題達成に関連する役割であるが、クラブリーダーには先に述べたように集団維持機能のほうが強く求められる。すなわち、(6)や(8)の役割である。(9)、(10)、(13)、(12)などはメンバーから卓越したリーダーの場合にみられるもので、同年輩のグループ内で自然発生的に生れたリーダーにはわずかにしかみられない。

結論的にいえば、クラブ・リーダーには集団内部の人間関係の調整者としての役割が最も強く要求されているといえよう。

そして、クラブを単なる仲よしグループの集まりで終らせないためには、ホーム指導員の適切な助言が必要なのである。

GAa1/1

8B-4-39



女性と仕事の未来館



00964384